第六章　福原遷都と源平の争乱

源平合戦図屏風　一ノ谷・屋島合戦図（神戸市立博物館蔵）

第一節　福原遷都

第二節　寿永の争乱

第三節　鎌倉幕府の成立

第一節　福原遷都

1　以仁王の挙兵

挙兵の背景

治承・寿永の内乱、すなわち源平争乱の皮切りとなった事件が、治承四年（一一八〇）五月の以仁王・源頼政による挙兵であった。この事件は、前年十一月の政変で後白河院を幽閉してその院政を停止し、さらに外孫安徳天皇をも即位させた清盛に対する反撃の開始でもあった。挙兵そのものは簡単に鎮圧されたものの、事件の影響はけっして小さいものではなかった。

何よりも、清盛が急遽摂津国福原に遷都する直接的な原因であったし、また挙兵に与同した権門寺院の反平氏活動は依然としてくすぶり続け、ひいては同年末の南都や園城寺の焼き討ちをも惹起することになる。また、この時発せられた以仁王の令旨が、諸国の源氏をはじめとする地方武士の一斉蜂起を促したため、急激に内乱が広まる要因になったと考えられているのである。以下ではまず、以仁王・頼政の挙兵の背景・意義について検討してみることにしよう。

『平家物語』によると、長男仲綱が清盛の嫡男宗盛に些細なことから侮辱されたことを怒った頼政が、以

仁王を説得して挙兵したとされる。しかし、近年の研究では、こうした理解に疑問が呈されている。この頼政は頼光を祖とする清和源氏の嫡流摂津源氏に属し、摂津国渡辺付近（大阪市）を本拠としていたと考えられる。彼は、保元の乱では後白河陣営に加わり、平治の乱でも土壇場で義朝を見限って清盛に味方したが、何ら恩賞も与えられていない。その後も、大内守護として内裏の警護に当たったり、悪僧の強訴の防御に動員されたりしていたが、平氏の陰に隠れて目立った活躍も手柄もなかった。

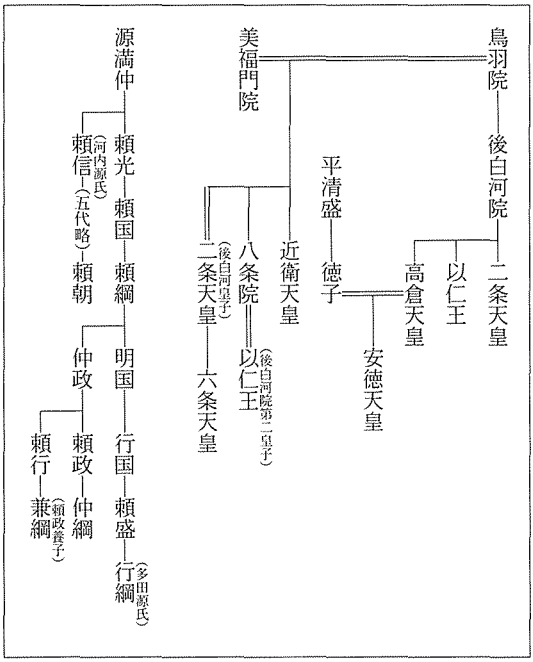


図40　以仁王挙兵関係系図

ところが、治承二年の暮れ、その頼政が清和源氏始まって以来の従三位に叙され、公卿の仲間入りを果たしたのである。この昇進は、和歌等を通して頼政と親しい関係にある右大臣九条兼実でさえも仰天するような破天荒なものだったが、頼政の公卿昇進を推挙したのはほかならぬ清盛であった。清盛は源平相並ぶべきという思想の下で、唯一残った源氏の武将にも恩恵を与えたいという趣旨の奏上を行っている（『玉葉』十二月二十四日条）が、おそらくは娘徳子が皇子（安徳天皇）を

出産したご祝儀というべき叙位と考えられる。したがって、彼は清盛には大きな恩義があったわけで、治承三年政変等で清盛の横暴に不快感を抱いたにしても、一族の運命を賭けて反平氏の挙兵を行う動機はなかったと考えられる。

これに対し、以仁王には平清盛に対する多くの怨念があった。彼は後白河と大納言藤原季成の女の間に生まれたが、建春門院以下平氏一門の圧力を受けて親王の宣下もなく、出家を運命付けられていた。平氏の目を逃れて元服したものの、治承三年政変では父後白河を幽閉され、彼自身の所領をも奪われるに至ったのである。しかも、清盛が強引に安徳を即位させたことを皇位簒奪とみなし、激しい憤りを感じていたと考えられる。

そればかりか彼には大きな後ろ楯もあった。叔母八条院である。彼女は鳥羽院と寵妃美福門院との間に生まれ、莫大な王家領荘園を継承すると同時に、鳥羽院の正統な血統として大きな政治的権威も有しており、政界に隠然たる勢力を保持していた。以仁王は女院から経済的な支援を受けるとともに、安徳に対抗する皇位継承者としての正統性をも付与されたのである。こうしてみれば、挙兵の首謀者が、『平家物語』の記述とは逆に以仁王であることは明白といえよう。

頼政は八条院に仕える立場にあり、彼に従った下河辺氏以下の武士団も女院領の荘官であった。したがって、頼政をはじめとして、挙兵に参加した武士の多くは女院との関係で動員されたものと考えられる。

一方、この挙兵には、後白河と密接な関係にあった園城寺、治承三年政変における氏長者藤原基房の配流に憤激した興福寺といった大寺院の悪僧も参加している。こうした大寺院が与同した背景には、各寺院の

個別的事情もさることながら、宗教界全体の秩序改変を指向した平氏と権門寺院とのより根本的な対立が関係していたものと考えられる。

たとえば、治承三年二月、清盛は自身の尊崇する安芸国の厳島神社を、重事に際して朝廷から奉幣される主要な神社である二十二社に加えようとして問題を起こしている。また、すでに触れたように清盛は高倉院の退位後最初の社参として厳島参詣を強行しており、石清水・日吉といった先例を破った。このため、院の御幸に際しては、園城・興福両寺ばかりでなく延暦寺の悪僧までもが加わって、後白河・高倉両院を奪取しようとする計画さえ持ち上がっている。そして、何よりも多くの仏事・法会の主催者として従来宗教秩序の中枢にあった後白河を幽閉することによって、宗教界を混乱に陥れたことに対する大寺院の激しい反発が渦巻いていたのである。

こうして密かに挙兵の準備が進む中、平氏の横暴を訴え、諸国源氏の挙兵を促した有名な以仁王令旨が発せられたのが治承四年四月九日のことであった。この令旨は源義朝の末弟で、頼朝・義経等には叔父に当たる行家によって諸国にもたらされることになる。彼は八条院の蔵人となって京を立ち、同月の下旬には伊豆の頼朝をはじめ、東国諸国の源氏たちの下に令旨を届けたのである。

挙兵の鎮圧

しかし、この挙兵計画は早くも五月の初頭に平清盛の耳に入ってしまう。『平家物語』は、行家が元来居住していた熊野において、以仁王に与同する勢力と親平氏派が対立し、熊野別当覚応法眼が計画を清盛に密告したとする。『玉葉』によると五月十日、清盛が福原から突如入京したため、京には武士が充満し「世間又物騒」という状態となったが、その翌日に彼は福原に下向している。それから

四日後の十五日に、以仁王改め源以光の土佐への配流が決定され、王の邸宅が追捕されたことを考えると、清盛が以仁王に対する処置を決定するために上洛したことは疑いない。

一方、以仁王はいち早く自宅を脱出して園城寺に逃亡することになる。この時に王の邸宅の追捕に向かった検非違使は、美濃源氏の源光長と、頼政の甥で猶子となっていた兼綱であった。すなわち、平氏はまだ頼政の一族が以仁王に加担していることを知らなかったのである。『平家物語』（巻第四「信連」）によると、王は頼政からの急報で事前に脱出し、また追捕の際も兼綱は「存ずる旨ありとおぼえて、はるかの門前にひかえていたとされる。

十七日になると、平氏は王が園城寺に匿われているものとして、検校以下の僧綱に命じて身柄の引渡を求めたが、悪僧等は応ずるはずもなかった。なお『玉葉』の十七日条によると、王が行方を晦ましたことは福原の清盛に連絡されており、宗盛や時忠等在京の平氏一門はこれ以後も何事につけても清盛の沙汰を仰いだとされる。非常事態に際して、本来福原に引退したはずの清盛が前面に出ることになったのである。

さて、『平家物語』によると、この間悪僧等は延暦寺・興福寺に牒状を送り協力を要請しているが、『玉葉』の十九日条にも南都に牒送したとする噂が記されている。園城寺と興福寺の連携が形成されつつあったのである。一方、『玉葉』の二十一日条によると、大衆は王を決して人手に渡さないことを決定し、また以仁王自身も例え衆徒が見放しても自分はこの地で命を終えるつもりであると言い放ち、その意気盛んな様は見る者を感嘆させたという。おそらく、南都大衆の支援を得られたことから、王以下の意気も上がったのではないだろうか。

こうした情勢に驚いた平氏は、二十一日に園城寺攻撃を決定し、宗盛を始め頼盛・教盛以下の平氏一門と頼政に出撃が命ぜられることになった。依然として平氏は頼政が挙兵計画に加わっていたことに気づいていなかったのである。それだけに、同日夜半に頼政一族が突如として園城寺に向かい、以仁王への与同を明らかにしたことは平氏を震撼させたに相違ない。しかも、南都大衆の上洛が報ぜられ、山大衆三百人が加わったとする噂も流れるに至ったのである。宗盛以下の平氏一門は、辻々を武士たちが物々しく警護する中、安徳天皇を八条の平時子邸に移したのであった。そして、その翌二十三日、平氏一門が天皇以下洛中諸人を福原に連行するとの噂が流れたのである。

一方、事件そのものは、それから短時日で鎮圧されるに至った。以仁王・頼政一行は二十五日夜半に園城寺を出立して興福寺に向かったが、その途中の宇治において平氏の追討軍に追いつかれ、いったん逃れるものの加幡河原で殲滅されたのである。『平家物語』では、園城寺悪僧の裏切りのために六波羅夜襲計画も挫折し、危険を感じた以仁王以下は脱出を余儀なくされたとする。『玉葉』（五月二十六日条）によると追撃する平氏軍は三百余騎であったのに対し、以仁王の一行はわずか五十余騎に過ぎなかった。しかし、平氏を迎撃した頼政以下の戦い振りは、生を乞う様子は微塵もない、文字通り決死の奮戦であった。とくに頼政の甥で猶子となっていた源兼綱の剛勇無双の戦い振りは、かつての前九年・後三年合戦における英雄八幡太郎義家を想起させる程であったという。

しかし、結局は衆寡敵せず、平氏の大軍の前に頼政の一族・郎等はあるいは討死を遂げ、あるいは自殺した。そして、戦場を脱出した以仁王も、南都を目前にした光明山の鳥居の前で落命したのであった。もっと

も、頼朝が政治的に利用したこともあって、王の存命説はその後も長く流布しつづけている。それはともかく、以仁王・頼政の挙兵は、事件の勃発から十日余りで終焉を迎えたのである。

しかし、事件は大きな波紋を呼び、それから間もない六月二日、突如「福原遷都」が強行されることになる。次に、事件鎮圧の直後に突如「遷都」が実行に移された背景について検討することにしよう。

遷都の背景と意義

以下では「福原遷都」の問題を論じることにするが、これまでの叙述において「福原遷都」と括弧を付けたように、厳密に言えば遷都という言い方は問題がある。なぜならば、正式に福原に遷都が行われていなかったからである。遷都には天皇の命令を伝える宣命（せんみょう）が必要であるが、福原の場合に安徳天皇は公式に遷都を宣してはいないし、多くの政務機関や貴族も平安京に残っていた。したがって、治承四年（一一八〇）六月から十一月に及ぶ天皇の福原滞在は、本来は「福原行幸」などと称するべきものなのである。

また清盛が遷都を計画していたのは事実であるが、当初の輪田京計画が中止され福原が離宮と位置づけられた時期もあるなど、遷都計画も時期を追って変化している。そこで以下の叙述では混乱を避けるために、安徳天皇、高倉・後白河上皇らが福原に移り、半年近く福原に滞在した事件全体を通称に従って福原遷都、六月に天皇以下が清盛によって福原に移された出来事を福原遷幸、同年十一月に京に帰還した事件を還都と呼ぶことにしたい。

さて、以仁王の挙兵に園城・興福両寺が参戦し、延暦寺までもが応じる動きを示したことは、平氏に大きな衝撃を与えた。先にも述べたように、後白河の幽閉、厳島神社の位置づけの改変等、宗教界の秩序を大き

く改変しようとした清盛と有力寺院との対立は激化の一途を辿っていた。そして、安徳天皇を皇位の簒奪者と非難し後白河の救出を唱えた以仁王の挙兵に悪僧たちが与同したことは、彼らも同様に安徳天皇・高倉院政を否定する姿勢を示したことを意味している。もはや、清盛が擁立する王権と大寺院とは和解困難な極限状況に陥っていたことになる。

こうした緊迫した情勢を考えれば、多数の悪僧を擁した大寺院に囲まれた平安京が、軍事的にきわめて危険な状況に直面していたことはいうまでもない。また、先に触れたように以仁王に対し園城寺のほかに、興福・延暦両寺の与同が噂された二十三日の段階で初めて遷都の噂が流れた点も、平氏と大寺院との対立が遷都の背景に存したことを明瞭に物語っている。平清盛が急遽福原への脱出を決意した根本的な原因は、まさにこの点にこそあったと考えられる。

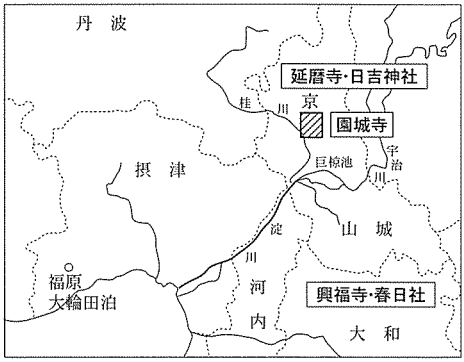


図41　平安京周辺の寺社勢力
（『日本の中世』8 所載の図を参考に作成）

また、こうした軍事的な問題だけではなく、都市の機能面からも平安京は限界に達していた。すなわち、京では安元（あんげん）三年（一一七七）に樋口富小路から出火して朝堂院や貴族の邸宅を焼失した「太郎焼亡」、翌治承二年に七条東洞院から朱雀大路までを焼いた「次郎焼亡」と称された再度の大火が発生しているが、この背景には人口の過度の密集と大規模なスラム街の存在が想定される。このため衛生面は劣悪化し、都市災害の危険も高まっていた。さらに、従来京が天皇をケガレから守る聖域という性格を有していたことを考えれば、

天皇を火災や戦乱等による死骸の充満といった「ケガレ」から防衛するためにも、平安京の放棄と新都の設定が想定された可能性も否定できない。

しかし、何より清盛が遷都を目指した根本的な原因は、新王朝に相応しい新都の造営という一点にこそあった。遷都には王朝交代という意識が関係する。すなわち、かつて平城京から長岡・平安京へ遷都が行われた背景には、長らく続いた天武天皇の皇統に代わって、天智天皇の子孫光仁・桓武天皇が即位し、新王朝に相応しい新都を造営する側面があった。清盛も後白河院政を停止して新たな王権を樹立し、しかも高倉・安徳と二代にわたり平氏の女性を母とする天皇が続いたことから、平氏と結合した新王朝が成立したと考えた。また、八条院らの正統王権を主張する勢力との決別も意識の中にあったことであろう。かくして、新王朝に相応しい新都の造営を企図するに至ったのである。

後述するように、福原遷幸後において還都にあくまで反対し福原に固執したことを見ても、この遷都の推進者が清盛であることは論をまたない。治承三年政変後、清盛は高倉院政・安徳天皇という体制を確立して、自身は福原に居住し政務の第一線に関与しない政権の外護者という立場にあったが、ここに至って遷都を強行し政務を主導するに至った。政権の軍事的な危機に際して、軍事面における平氏の総帥であった清盛が前面に登場するのも当然のことであった。したがって、福原遷都こそは清盛による軍事独裁の始まりだったのである。

遷都をめぐる軋轢

しかし、平氏一門が京の放棄、福原への遷都という方針で一致団結していたわけではない。このことは、以仁王以下の討伐が伝えられた翌日の五月二十七日、高倉院殿上で行われた園城・

興福両寺に対する処罰に関する公卿議定（会議）の経過から判明する。以下、『玉葉』同日条から、その様子を取り上げることにしよう。

ここで注目されることは、当日は議定の開始に先立って親平氏派の権大納言藤原隆季が、高倉院、平宗盛・時忠等、平氏首脳と打ち合わせていた点である。先にもふれたように、当時の公卿議定に、平氏一門は出席しないことが通例となっていた。このため、隆季や当時参議であった源通親等の親平氏派公卿が平氏の意見を代弁する形態をとっていたのである。そして、議定の場において隆季・通親は、園城寺については事件に参加した張本人のみの処罰を主張し他の公卿と歩調を揃えたが、興福寺については「謀叛一にあらず」という理由から即時追討を主張して、左大臣藤原経宗や右大臣九条兼実等の公卿たちと鋭く対立するに至った。

興福寺は、大和を中心とする所領問題、摂関家に対する平氏の圧迫等を巡って、長年平氏とはとくに厳しい対立を続けてきた寺院である。そして、平氏支配下の京を脅かす、最大の武装集団でもあったと考えられる。しかし、もし福原遷都が平氏一門の既定の方針ならば、もはや興福寺は脅威とはなりえないのであり、この場で強硬に興福寺追討を主張する必要はないのである。したがって、興福寺を即時追討せよという主張の背景には、安徳天皇や平氏が依然として在京するために、京の軍事的脅威を除こうとする考え方が存在したことになる。すなわち、高倉院や宗盛をはじめとする平氏の要人たちは、平氏在京論を強く主張していたものと考えられる。

結局、議定では興福寺追討を強行しようとした平氏側の意見は却下された。そして、その三日後の三十日に遷都計画が表面化し、早くも六月二日に行幸が行われることになる。議定で興福寺追討計画が退けられた

ことが、平氏在京論にとって痛手であったことは疑いない。しかし、議定の結果は清盛以下の平氏を拘束するものではなく、現に十二月の南都焼き討ちは清盛の一存で行われたのである。したがって、議定の結果急遽遷都に決したとは考えられない。また、すでに二十三日の段階で遷都説が流れたように、早くから遷都計画もくすぶっていた。

こうして見ると、かねてから平氏内部で清盛を中心とする遷都論と、高倉院や宗盛以下の在京論が競合しており、以仁王挙兵後に強まった遷都の動きを興福寺追討で制止しようとした在京論が議定の敗北で後退したため、突如遷都が強行されたと考えられる。そして、こうした清盛の強引な姿勢が、遷都における準備不足の原因となったし、また平氏内部にも根強い遷都反対論を生ずる背景ともなったのである。

2　福原遷幸と混乱

突然の福原遷幸

治承四年（一一八〇）五月三十日、以仁王挙兵の最中から噂に上っていた、天皇・両上皇の福原遷幸の決定が公卿たちに伝えられた。右大臣九条兼実は「天狗の所為、実に直事にあらず。乱世に生まれ合ひ、かくのごときの事を見る、悲しむべき宿業なり」と驚愕と悲嘆を記し（『玉葉』）、親平氏派の権中納言藤原（中山）忠親も「洛中騒動、悲泣と云々」と貴族たちの様子を記した（『山槐記』）。翌六月一日、兼実は、行幸に随行すべきか否かを清盛に尋ねたが、宿舎もないので急いで来る必要はないとの返答を受けた。兼実は、随行者がすべて清盛の独断で決定され、院はそれに従うだけとのことを耳にしている。

院も退けて福原遷幸を強行しようとする清盛の強硬な姿勢が窺われる。

六月二日、ついに福原遷幸は現実のものとなった。『玉葉』によると、清盛に伴われた安徳天皇・高倉上皇・後白河院らは早朝卯の刻（午前六時頃）に出立していった。京外の行宮（あんぐう）（仮の御所）への行幸は延暦（えんりゃく）年間（七八二～八〇六）以来、つまり平安遷都以来初めてという「希代の勝事」、すなわち世にも稀な大事件（むろん悪い意味での）であった。その理由について兼実は、南都攻撃のための一時的な避難、あるいは以仁王の残党を恐れた措置とする観測もあったが、遷都とする噂もあったと記す。遷都を信じたくないために、自身の希望的観測を記したのであろう。

最後に「緇素貴賤、仰天をもって事となす。ただ天魔、朝家を滅ぼさんと謀る。悲しむべし、悲しむべし」と締め括ったが、この兼実の感慨は貴族たちに共通するものであったに相違ない。多くの寺社の儀礼と結びつき、ケガレを排除する聖なる空間であり、そして恒久的な宮都と考えられていた平安京を捨てることなど、貴族たちには想像だにできなかったことであろう。しかも、皇胤とみなされたとはいえ、一介の臣下に過ぎない清盛が遷都を強行することなど、とうてい容認できるはずもなかったのである。

写真37　九条兼実像（天子摂関御影）
（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

続いて『玉葉』は、遷幸の様子を見物した者からの伝聞によって、行列のありさまを次のように記している。数千騎に及ぶ武士が、二列に分かれて一行を挟む形でものものしく警護していた。先頭は屋

形のついた輿に乗った清盛、そして女車、清盛室時子と清盛の娘で摂政近衛基通室完子の乗った輿、続いて安徳天皇の輿が進んだ。天皇に供奉したのは左大将徳大寺実定、検非違使別当平時忠、参議兼近衛中将の藤原実守・源通親、それに両蔵人頭などの殿上人であった。ついで摂政藤原基通の車、さらに藤原隆季・邦綱らを従えて高倉院の御幸が続き、最後は手輿に乗った平宗盛であった。なお、行列の記述には見えないが、鳥羽殿に幽閉されていた後白河院も、福原に連行されていった。

その日は摂津国大物（尼崎市）に宿泊し、翌日福原に到着する予定となっていた。このように、鳥羽から淀川を船で下り、河口付近で一泊して、陸路または海路を用いて福原に赴くというのが、当時の貴族の交通路として一般的なものであった。

さらに兼実は、福原では内裏に平頼盛の邸宅が、高倉上皇の御所に清盛の別荘が、後白河院の御所

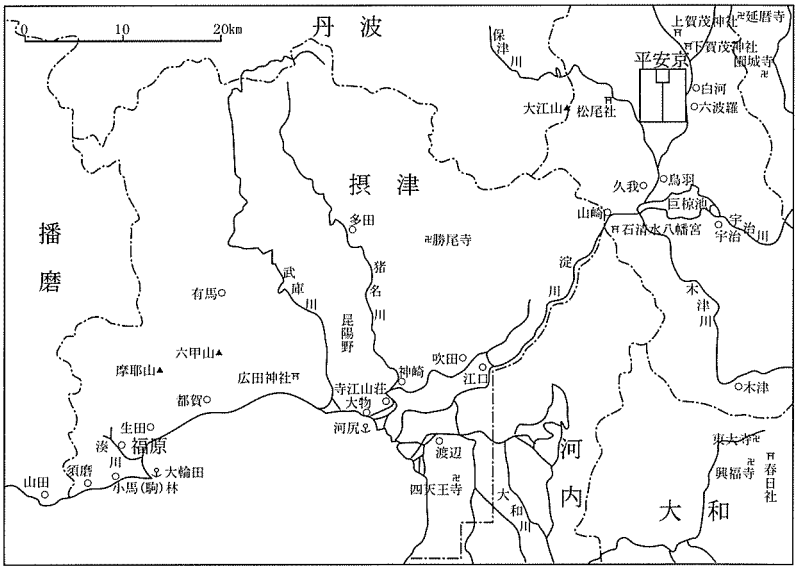


図42　福原と京都（『平清盛の闘い』所載の図をもとに作成）

には教盛邸が、そして摂政基通の宿所には大宰府にある安楽寺（現在の太宰府天満宮）の別当安能の房舎がそれぞれ当てられたが、随行した多くの人々には宿所がなく、「道路に坐すがごとし」と述べている（『玉葉』六月二日条）。

急遽の遷幸による準備不足が窺われるが、福原ではそれまでも度々千僧供養が開催されて多くの僧侶や貴族たちを迎えており、随行者たちの住居がなかったとする『玉葉』の記述には疑問が持たれる。安徳天皇の御所とされた頼盛の邸宅は、先述のように敷地内で流鏑馬が行えるほどの壮大なもので、天皇の御座所として不足のないものであった。なお、どういうわけか四日夜になって、天皇と高倉院が御所を交換し、天皇は清盛の別荘に、院は頼盛の邸宅に移っている。

それはともかく、これ以後、およそ半年にわたって天皇・上皇・摂政という王権の中枢が福原に移り、重要な政務は福原で行われることになった。そして様々な軋轢や紆余曲折を経ながら、清盛は平氏と結ぶ新王朝に相応しい新都福原京の建設に全力を尽くすことになるのである。福原遷都は治承三年政変の総仕上げの意味をも有していたといえよう。

反面、先述のように平氏政権が在京すべきとする立場からは、興福寺追討という強硬な方策が検討されていたにもかかわらず、清盛はそれを回避して福原への遷幸を行っている。したがって、福原遷都には寺社勢力との対決を避けて、逃避・避難するという消極的な意味合いもあったといえる。福原遷都の性格を、単純に積極的なものとみなすことには疑問が持たれるのである。

輪田京構想の挫折

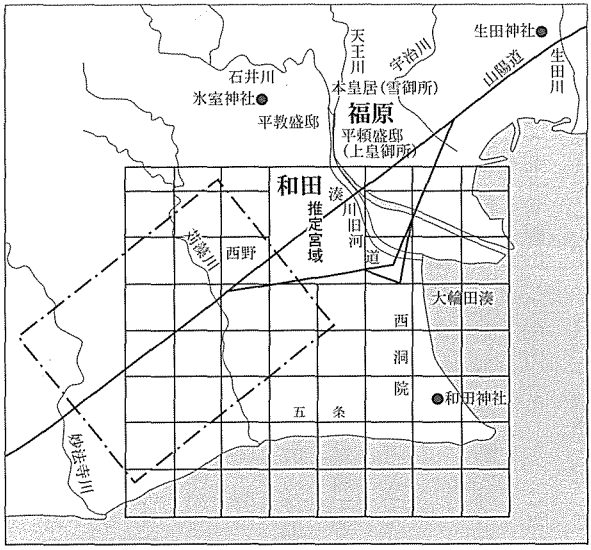
清盛は遷幸を強行すると、ただちに新都造営の計画を立案することになる。『百練抄』によると、六月九日に大納言藤原実定・参議源通親・左中弁吉田経房以下が輪田の遷都予定地に派遣され地域の調査に当たった。この時、左京の「条里」が不足し、右京が設定できないことを報告したという。やがて平氏政権から距離を置いていた右大臣兼実も福原に呼びつけられ、宮都造営について高倉院から諮問を受けることになる。以下『玉葉』の叙述によって、兼実の行動をみてゆくことにしたい。

兼実は六月十三日申の刻（午後四時頃）、に京を出立し、近日の日照りで水が乏しい淀川を時間をかけて下り、ようやく寅の刻（午前四時頃）に邦綱の摂津寺江の邸宅に到着し休息した。この日照りこそ、翌年の養和の大飢饉を招く異常気象であった。

翌十四日未の刻（午後二時頃）、船で大物に至った兼実は、輿で福原近辺の湊川に至り、そこから牛車で福原に赴いている。福原までの道路は砂地のため車の走行には支障があった。兼実が高倉院の御所に赴いたのは、子の刻（午前零時頃）になっており、院はすでに就寝していたため対面できなかった。滅多に遠出することのなかった貴族にとって、京から福原への移動は大旅行だったのである。

明くる十五日、兼実は参内して蔵人頭経房を招き、前日寺江から福原に向かう途中で受取った経房からの三カ条の諮問に答えた。諮問の内容は、まず第一に、左京の条里が不足しているため、宮城、すなわち内裏を平安京より縮小するか否かという点、第二番目には、右京の予定地に平地がわずかしかない点、そして第三番目に、本来なら今秋に行われる安徳天皇の即位にともなう大嘗祭の開催場所と、遷都と並行した場合に過重となる費用負担をどうするかというものであった。

これによると、造営が計画された新京は、左京は南が五条まで、東が朱雀大路から洞院西大路までしか設定できないとされた。平安京に比べれば、およそ四分の一の規模ということになる。このため、兼実は宮城の縮小も止むなしと返答している。まず左京が取り上げられたのは、当時の平安京では事実上左京のみが首都として機能していたことの反映であった。また、王権を象徴する宮城の縮小には、すでに平安京でも閑院内裏が通常化するなど、本来の規模は問題ではなくなっていたことが関係している。



—·—は旧説が想定する和田京プラン
———は足利健亮が想定する和田京プランをもとに平安京の条坊をあてはめたもの

図43　福原と和田京プラン（『平清盛の闘い』所載の図をもとに作成）

一方、右京に想定される地域は、山・谷が入り組んだ地形で、宮都として用いることは困難だが、兼実は大山・深谷ではないので、必要に応じて工事を進めてゆけばよいと述べている。こうした右京に関する対応は、平安京において、右京がすっかり衰退しており、宮都にとってとくに必要な区域ではなくなっていたことと無関係ではない。

ここで想定された条坊は、『玉葉』に「条里」と見えることから、かつては摂津国の条里に沿う形で設定され、北東から南西に走る

山陽道を朱雀大路としたものと考えられた（図43の一点破線の領域）。しかし、足利健亮は平城京の指図（さしず）が参照されていること、天子南面が原則であることなどから見て、実際には平城・平安京と同じく磁北を基準に南北に真っ直ぐの宮都が想定されたと指摘し、これが現在の通説となっている。

新京の区域については和田岬の西側、現在の兵庫区付近に推定されているが、福原を含むか否かなど、不明確な点が多い。いずれにせよ先にみた諮問からも明らかなように、東西に細長い地形では、平安京と同じような条坊を設定することは根本的に無理であった。そのためか、突然輪田新京案は撤回されてしまう。

十五日、高倉院御所を訪れた兼実の目前に登場した平時忠は、蔵人頭経房に対し「和田」（輪田）に変えて小屋野（こやの）を京とし、早速木工寮（もくのりょう）の役人を派遣するように命じた。和田は町数が少ないので困難が多く、人々が納得せず苦しみの様子があるため、便宜のある小屋野を選定したという。むろんこれは清盛の指示であり、これを聞いた高倉院は無言であった。

小屋野は現在「昆陽野」と記し、兵庫県伊丹市付近に属する。武庫川流域の平野部で、のちの西国街道、今日の国道一七一号線沿いの場所であった。これを聞いた兼実は、輪田であろうと小屋野であろうと、とにかく「遷都なきにしかず」と日記に憤懣を記している。院御所の女房も、故郷の京を思って嘆かない者などなく、涙を流す者もいると語った。貴族や宮廷の人々の遷都に対する忌避感が窺われる。

兼実はその日の午後、福原から京に向かった。帰京した兼実の耳に届いたのは、今度は厳島内侍（ないし）の託宣による、播磨国印南野（いなみの）への遷都計画であった（『玉葉』六月十七日条）。印南野は加古川市から明石市にかけての播磨（はりま）平野の地であるが、この案はすぐに「水なきにより叶ひがたし」（『百練抄』六月十五日条）として却下さ

れている。印南野は清盛が仁安二年（一一六七）に太政大臣を辞任した際、朝廷から大功田として与えられた地の一つであった。小屋野といい、印南野といい、この付近には自由に宮都が設定できたことになり、清盛の強力な支配が浸透していたことになる。

それはともかく、相次ぐ宮都案の提示は、遷都が急遽実行され計画が不十分であったことを如実に物語る。以後、しばらく宮都造営計画は沙汰止みとなる。しかし、清盛は遷都計画を断念したわけではなかった。

遷都論の敗北　遷都計画が相次いで頓挫した結果、七月半ばに清盛は「福原、しばらく皇居となすべし。道路を開通し、宅地を人々にたまふべし」（『玉葉』七月十六日条）という方針を打ち出した。七月二十九日に福原を出立した大外記清原頼業の話によると、八省・大内の移転には及ばず、平安京も捨て去ることはなく、離宮を立てて暫く滞在するという高倉院の方針が示されている（同上八月四日条）。

図44　小屋野・印南野・和田の位置関係

しかし、天皇・上皇の福原滞在が長期化することに相違はなく、高倉院周辺から早期還都を求める声が挙がることになる。最初に還都論の口火を切ったのは、この当時しだいに病状を悪化させていた高倉院であった。『玉葉』の七月二十四日条によると、院は「御悩ことに重し」という状態で、不食・憔悴が日を逐って悪化し、「温気」（発熱）もあるという状態であった。二十八日には、従来の院御所頼盛邸を陰陽師らが悪所としたため、蔵人頭重衡の邸に移っている（『山槐記』七月二十八日条）。さらに、翌二十九日には兵仗・封戸、そして太上天皇の尊号を辞退し（『玉葉』七月二十九日条）、政務も困難になったとして、摂政藤原基通に政務を譲っている。

『玉葉』の八月四日条には、高倉院の夢中に生母建春門院が現れ、自身の墓所のある京を離れたことを怒ったという噂が記されている。院は夢想を通して福原遷都に対する反対を表明したことになる。したがって、この時期に院が尊号を辞退した背景には、単に健康状態の悪化という問題だけではなく、強引な遷都を進める清盛に対する抗議の意志表示という意味もあったものと考えられる。同日条には、同様の夢想がすでに中宮徳子や、院の執事別当権大納言藤原隆季にもあったことが記されており、院やその周辺に還都論が広まりつつあったことを窺い知ることができる。

さらに、同日条は仁和年間（八八五～八九）の作成と称される「嵯峨隠君子算道命期勘文」に言及している。これは、平安京こそは東に賀茂社、西に松尾社といった厳神・猛霊が鎮座し、南に開け北がふさがるという理想的な地形で、桓武天皇が永代の都と定めた地と記された内容である。勘文の真偽は不明確だが、こうしたことが取沙汰されることは、貴族たちに還都の願望が強まっていたことを物語るものである。

さて、先述のように藤原隆季は以仁王挙兵鎮圧後の園城寺・興福寺の処罰を定める五月二十七日の議定において、高倉や宗盛を代弁して強硬な興福寺即時追討論を主張していた。それだけに、彼は還都論の中心的存在となる。隆季は「遷都のこと、およそ叶ふべからざるものを。よんどころなき沙汰かな。今、始終みるべし」などと、清盛に対する批判を述べた。密かに語ったはずのこの言葉は清盛に伝わり、彼を激怒させるとともに、何としても遷都を実現させようとする「励心」を起こさせたという（『玉葉』八月八日条）。

ついで、隆季は同じく院別当である平時忠とともに、高倉院の意向という形をとって、清盛に還都を命ずるに至ったのである。ところが、清盛は「それは結構なことだ。しかし、この老法師はお供するつもりはない」と、手厳しくはねつけた。清盛はもはや高倉院の意志をも無視するに至ったのである。これを聞いた隆季・時忠たちはたちまち悄然となり、以後は全く還都を口にする者もなくなったという（同上八月十二日条）。高倉院近臣たちにとって、高倉の意志さえも否定する清盛の強い態度は、予想外だったのではないだろうか。治承三年政変において、清盛は高倉の権威を利用して後白河を幽閉し、さらに安徳の即位をも実現した。しかし、福原遷幸以降、独裁を開始した清盛は、もはや高倉の権威・権力をも超克するに至ったのである。

このように、高倉院や貴族たちによる還都論は、清盛に大きな動揺を与えることはなかった。同じ『玉葉』の八月十二日条によると、高倉や還都派の意向を逆撫でにするごとく、清盛は延期が噂されていた大嘗祭を福原で開催する意向を明らかにしている。さらに八月二十九日条によると、兼実は福原から上洛した蔵人頭経房より、清盛が五節以前に私宅として皇居を造営し、明後年までに皇居の近隣に八省と「要須之所司」を建設して、内裏を移転する方針が決まったという報告を受けた。これを耳にした兼実は「およそこの儀、左

右あたはず、言語の及ぶところに非ざるか」と仰天を隠すことができなかった。こうして福原を正式の首都とする、すなわち遷都の方針が決定的となったのである。

3　福原京の建設

福原遷都と寺社

治承四年（一一八〇）八月末、紆余曲折を経ながらも、ついに福原への正式遷都の方針が確定した。清盛は新都造営に邁進してゆくことになる。しかし、福原遷都を断行する上で、重大な問題が残っていた。先述した「嵯峨隠君子」の勘文にも賀茂・松尾社の存在が強調されているように、平安京は天皇・朝廷が尊崇する寺社が存在し、その儀礼と密接に結合した宮都であった。したがって、天皇や貴族たちが福原に居住した場合、儀式を担当する貴族たちは福原と平安京を往復せねばならず、宗教行事に重大な支障が生じることになる。

たとえば、伊勢神宮のほか、主に京やその周辺に所在する畿内の二十二社に奉幣し、豊作と天皇・国土の平安を祈る祈念穀奉幣という儀式がある。これは本来七月に行われる予定であったが、諸国の兵乱の影響もあって四度も延期され、十月下旬にようやく行われるありさまであった。これにはさすがに平氏と親しい中山忠親も「末代の遠都の公事、ただ便宜に随うべき事なり」と投げやりな感想を述べている（『山槐記』十月十七日条）。こうした儀式・儀礼の違例や混乱は安徳天皇の権威を動揺させる面があったものと思われる。

逆に王権と結合して権威を保持してきた多くの寺社の側でも動揺や混乱を生じていた。その軍事的脅威が

遷都の一因ともなった興福寺でも内紛が発生し、七月には春日社の正体を盗んで福原に赴こうとする者を大衆が捕らえるという事件まで発生している。反平氏の中心勢力だった興福寺にとっても、福原遷都によって宮都と遠く離れることは大きな脅威だったのである。

本来、親平氏派の延暦寺も当初は沈黙していたが、九月に入って東国の反乱が激化すると、ついに大衆が蜂起し強硬に還都を要求するようになる。そして内乱が激化した十月下旬には、遷都停止の裁許がなければ「山城・近江両国を押領（占領）」する（『玉葉』十月二十日条）という強硬な申入れが行われるに至った。

写真38　熊野神社（兵庫区）

しかし、清盛は延暦寺の動向にほとんど反応を示していない。遷都の経緯を考えれば、それも当然のことであった。権門寺院の政治介入、それによる軍事衝突を回避するために遷都は企図されたのである。したがって、遷都が決断された時点で、平安京と密着して宗教的権威を築いてきた延暦寺との提携は事実上断絶していたことになる。延暦寺における還都論の発生は当初から予想されたことであったといえよう。

このころ清盛は再三厳島・宇佐に下向している。また、厳島の神主は福原に滞在していたし、厳島内侍と称される巫女たちも福原に常駐し、賓客に唐風の舞を披露していた。福原と厳島は緊密な関係にあった。当時の厳島神社では、大日如来を天照大神の本地とする神仏習合思想と厳島神社の信仰が結合しており、同社は皇祖神という性格を

帯びていたとされる。清盛は、この厳島神社を伊勢神宮に代わる新王朝の宗教的中心に位置づけ、宇佐八幡などと結合した新しい宗教秩序の形成を目指していたのである。

また福原周辺には北野神社・熊野神社など清盛が勧請したとする伝説を有する神社もある。旧来の生田・長田神社などとともに、こうした神社に新都を鎮護する役割を期待していた可能性も高い。新王朝と新首都には、それに相応しい新たな宗教体系が必要であった。清盛は、旧都平安京の寺社には背を向けて、福原と瀬戸内海を結合させた宗教体系の確立を計画していたのである。

福原の発展

鴨長明の『方丈記』には、福原遷都に際して「家はこぼたれて淀河に浮び」「日々にこぼち川も狭に運び下す家」があったという印象的な記述がある。福原遷都後に平安京から多くの家屋が水運を用いて移築されたというのである。しかし、こうした事態は遷幸直後から、すぐに発生していたわけではない。『玉葉』治承四年（一一八〇）八月二十九日条によると、蔵人頭吉田経房は記主九条兼実に向かって「旧都の人屋、一人もいまだ移住せず、諸公事しかしながら彼都においてこれを行はる」と述べている。本格的な遷都方針が決まるまで、宮都の造営は行われていなかったのである。

また、それまでに土地を与えられたのも、一門以外では平氏と親しい貴族のみであった。『山槐記』の記主で、平徳子の中宮大夫、皇太子時代の安徳天皇に春宮大夫を務めるなど、平氏と密接な関係をもった中山忠親が、福原に土地を与えられたのは八月十二日であった。その彼が邸宅の棟門を京で建造し、『方丈記』の記述のように堀川から水運を用いて福原に運んだのは九月六日になってからである（『山槐記』）。

この忠親の給地は皇居予定地の南一町とあり、まさに福原の中枢に位置していた。在地の武士と考えられ

る輪田四郎則久が「沙汰」をしたとあるので、土地の整備や管理などは地域の情勢に通じた平氏の家人が担当していたのであろう（以上、『山槐記』八月十二日条）。

また、給地は「四方、或いは卅一二丈、或いは卅四五丈也」（一丈は約三メートル）とあり、四〇丈四方の正方形を一町（公卿の邸宅の基本区画）とする平安京に比べると、やや小さく、しかも正方形になっていなかった（同上八月二十三日条）。狭小な原因は、地形の制約などから一町の長さ三六丈を採用したためとする説もある。また、清盛が宮都造営の参考にした平城京では、道路の中心と中心の間を一町とし、隣接する道路の幅の半分を宅地から削減していた。福原もこの方式を採用したと見られるので、忠親の宅地が正方形にならなかったのは、異なる幅員をもつ道路に接した結果であろう。

さて、先述したように、八月下旬に清盛私邸として内裏を造営し、八省以下所司を移転するという遷都の方針がほぼ決定した。これに合わせて、福原の都市計画や建築も急速に進んでゆくことになる。平氏から距離を置いていた兼実のもとにも、土地が与えられたという報告が入っており（『玉葉』九月八日条）、おそらく他の公卿たちにも同様の措置がとられたのであろう。これを裏付けるように、同書十二日条では、兼実を訪ねた参議藤原定能（さだよし）が、「今は、指せる公事之外、故京にかえるべからず」と語っており、福原在住の公卿たちは特別な公務以外に平安京に帰ることが許されないという状態となっていたのである。

福原の首都化、それにともなう公卿たちの移住という方針によって、邸宅の建設も進んでゆくことになる。忠親は先述の棟門に続いて、「宿所屋一宇」を京で造って福原に運んでいる（『山槐記』九月二十日条）。大工の数が少ない福原では、建築に限界があったのであろう。『方丈記』が描くように、京で建造された建物が

相次いで淀川を下り、福原に輸送されたのはこの時期のことであった。

しかし十月に入ると忠親は十余人の工を伴って給地に赴いたとあって（『山槐記』十月七日条）、各邸宅の建設が隆盛を迎えるとともに、福原における大工の数も増加した様子が窺われる。そして、十三日には宿所の棟上げを迎えるが、平安京からの方角が悪いことから、内裏となる清盛邸と同様に移徙に際していったん井戸長房という者に譲与する形式をとっている（同上十月二十一日条）。一方、兼実も家司の頼輔入道・基輔父子を給地に派遣したが（『玉葉』十月七日条）、給地が確定していないとの報告を受けている（同上十月十三日条）。おそらく土地は平氏に親しい人々から順に与えられていたのであろう。

このほか、大福長者と称され、清盛の盟友であった五条大納言藤原邦綱の宇治新邸も十一月はじめに完成している（『吉記』十一月二十三日条）。この邸宅は内裏に近く、「華邸」と称賛されるような見事な邸宅であったらしい。平氏の側近たちは内裏造営に備えて、その近隣に邸宅を構えつつあった。そして、十一月十一日、清盛が全力を傾注した新造内裏が完成し、安徳天皇は正式な転居を意味する「移徙」を行うに至ったのである。

新造内裏移徙と街路

新造内裏への移徙の行幸経路について、蔵人頭経房は、日記に次のように記している（『吉記』十一月十一日条）。

路は御所南大路を東行し、東大路に至りて南行し、更に東折す。東造路より南行し、入道太政大臣亭の北大路に至り西折し、西南門より入御す。

移徙前の安徳の御所（本内裏）は先述のように平野に所在した清盛邸であった。清盛邸が雪御所の北にあっ

た（『山槐記』十一月二十二日条）ことから、雪御所を新内裏とする説もある。しかし、右の史料に見える清盛邸からの行幸経路や、平野に隣接する地名遺称地との関係から判断すると、新内裏を雪御所とする説は成り立ち難い。新内裏は清盛邸より東南に下った場所にあったわけで、地形の関係等から荒田の頼盛邸付近とする説が有力である。

『吉記』にみえる「入道太政大臣亭」が清盛の邸宅であることは論をまたないが、これが新たな清盛邸で新造内裏がその南にあったのか、内裏は清盛が私的に造営するとあったことから、清盛の邸宅自体が内裏であったのか、二つの解釈が可能である。

一方、福原には街路が存在し、「大路」と「造路」の二種類があったことが分かる。もっともこの名称は経房が記入に際し便宜的に付したものであるが、おそらく前者は以前から存在した基幹道路、後者はその名称から推測すると遷幸以降に新たに設定された道路を称したものではないだろうか。また、清盛の邸宅から行幸路がまっすぐ南行せず、大きく東へ迂回して、内裏に向かったとあることから考えると、新内裏の北側にあった邸宅群は平安京のように碁盤の目状の街路に沿って整然と並んでいたわけではなさそうである。平地が狭く急峻な山麓にあったという地形の制約や、必要に応じて邸宅を造営していったことも関係したのではないだろうか。

それはともかく、この安徳天皇の移徙に参加した公卿には、上卿として儀式を取り仕切った左大将藤原実定をはじめ、大納言源定房・権大納言藤原宗家、権中納言藤原兼雅・平時忠・同頼盛・藤原朝方、参議藤原実守・源通親、さらに散三位では藤原親信・同頼実・同雅長といった人々の名が見える。平氏一門や側

近のみならず、公卿の大半が列席していたことがわかる。儀式の壮麗さ、規模の大きさなどからみて、この安徳天皇の移徙は、遷都にも匹敵する重大な意味をもつ儀式であったといえよう。もはや福原京の完成は目前にあった。

しかし、後述するように、この頃すでに清盛は、還都の決意を固めつつあったのである。治承四年（一一八〇）十一月といえば、源頼朝・義仲らによる東国の反乱が熾烈をきわめ、しかも富士川合戦における平氏追討軍大敗の影響もあって、畿内に近い若狭・近江など畿内近国にも反乱が及びつつあった時期である。そして、激化した内乱鎮圧問題こそが、万難を排して遷都に全力を注いだ清盛に福原遷都断念を決断させることになるのである。

還都の問題にふれる前に、文献や発掘の成果によって、福原における平氏一門や貴族たちの邸宅の様子を復元してみることにしたい。

福原における邸宅　淵の所説を紹介しよう。

まず、遷幸直後から安徳天皇の内裏として用いられた平清盛の邸宅については、『山槐記』の十月十八日条に指図が残されており、この指図には同日行われた長日法華読経における着座等が記されている（図45）。この図は書き写しなどでやや不正確だが、正面中央三間が広庇で、その両脇と東西に普通の幅の庇が付き、西側の南に廊が突出ているらしい。ただ正面（庇部分）の柱通りと身舎の柱がずれているし、身舎の中央西寄りの柱が抜けているか、あるいはずれて描かれているのか不明確なところもある。また指図に寝殿の正面

に木階が記されていないが、これはこの日より前の十四日の摂政（藤原基通）初度上表のおりの記事でも、寝殿にも西廊の南にも階（段）がないことがみえるから、南に階段は付けられていなかったことが確かめられる。

指図をもとに平面図を推定復元すると、清盛邸の寝殿の規模は五間四面で簀子縁がつき、西には対屋がなくてすぐに廊がとり付いて南に延びていたことがわかる。平安京で安徳天皇の里第になった五条東洞院の邦綱邸の七間の寝殿と比べると、この清盛の別荘はひとまわり小さかったことは確かであるが、地方に建った別荘の建築としては、寝殿だけのこの程度の建築で充分だったのであろう。清盛邸の所在地については従来から雪見の御所にちなむ地名を残す雪御所町付近とする説が強い。

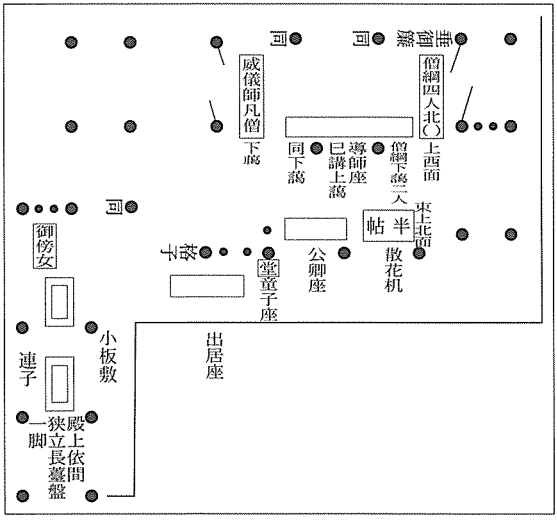


図45　『山槐記』に見える平清盛の邸宅の指図

清盛の後継者宗盛の邸宅も『山槐記』に登場する。治承四年（一一八〇）十月十三日、安徳天皇が清盛邸から方違（かたたがえ）のために一時平宗盛邸に移った時の状況を、忠親が伝聞として記している。この邸は「公卿、御殿中門南方に向かい、東を上、北に面して列立す。件の所、三間四面の寝殿、東庇巡りて中門廊に当たる。

よって東方これなきの故〔也〕と云々」とあって、この邸の寝殿は身舎の正面の柱間数が三間あり、その四方に庇がついた建物（正面の柱間を数えると五間）であり、その東の庇に南に延びた中門廊がつき、中門がその先に造られており、寝殿の東には対屋などはなかったことがわかる。すなわち、東西に対屋をもった正規の寝殿造には遠く及ばない建物であった。中門の位置から、道路は邸の東にあったことが推定される。

方違のためとはいえ、このような三間四面の小さな寝殿を天皇の御所に用いなければならなかったこと、しかもそれが清盛に次ぐ平氏の有力者宗盛の邸宅であったことは、総じて福原における平家一門の邸宅が小規模であったことを物語る。なおこの邸の位置はよくわからない。

先述した清盛造営の新造内裏についても『山槐記』から様子を窺うことができる。八月二十四日、高倉上皇の御所に赴いた忠親は、平時忠から前権中納言雅頼が作成した皇居の指図（設計図）を提示され意見を求められた。これによると、新造内裏は大内（内裏か）を模しているが、少々柱間の数が少なくなっており、北側はただの里亭（公卿の住宅）風であったという。忠親は露台（紫宸殿と仁寿殿をつなぐ屋根のない台）の西の土庇が長橋から離れているので、臨時祭が雨だったときに往き返りをどうするかなど、少しは問題があるなどと意見を述べている。

新造内裏は、わずか三カ月ほどで五節には間に合うように完成し、十一月十一日に先述のような賑々しい移徙が行われ（『吉記』）、十三日には天皇が即位の後に最初に政務をとるときの儀式である万機の旬が左大臣藤原経宗を上卿として行われた（『玉葉』）。しかし、中山忠親は「御殿便宜無し」としており、長橋の使い方についても批判を加えている（『山槐記』十一月十九日条）。急ごしらえの内裏が、種々欠陥を抱えていたこと

が窺われる。豊明節会が新造内裏で行われた二十日、忠親・経房らのもとに還都の日程が決定したという連絡が届いたのであった。

なお、福原に関係する遺跡として忘れてならないのは、平成十五年（二〇〇三）に神戸大学医学部附属病院の敷地内で発見された二本の壕である。北側が薬研壕、南が箱（畦）壕で、その深さは当時の地表からだと二本ともに約二メートルと全く同じで、復元すると上部の幅は薬研壕が約二・四メートル、箱壕が一・六メートル、その上端の間隔は一・二メートルで、磁北から八四度ふれた東西方向に完全に平行に通っている。そして発掘された部分のみで東西に三九メートルに及ぶ壮大な規模をもつ。

福原において、これほど大規模な遺跡が発掘されたのは初めてのことであったから、当時大変な話題となり、右に述べた新造内裏、あるいは頼盛邸に付随した施設とする説など、その性格をめぐって多くの議論が交わされてきた。ただ、これらの議論の前提には、二本の壕が同時に平行して存在していたとする理解があった。

ところが、平成二十年に刊行された、兵庫県教育委員会発行の『楠・荒田町遺跡Ⅱ　神戸大学医学部附属病院　埋蔵文化財発掘調査報告2』によると、「二重の壕が同時期に存在していた可能性は、両壕から出土した遺物の検討からかなり低いものと考えられるようになった」という。そして、「両者は違う意図で掘削されたらしい」との見解が示されている。したがって、今後は、出土遺物の分析を通して掘削年代を慎重に再検討し、その性格を議論してゆく必要があるだろう。

4　還都とその意義

清盛の嫡男前右大将宗盛といえば、優柔不断で父の言いなりになり、逆らうことなど思いも寄らない人物とされる。ところが、何とその宗盛が「遷都あるべし」と父清盛に要求して口論に及び、人々を驚かせたというのである。ここでいう「遷都」とは、もちろん当時の事実上の京である新都福原から、旧都平安京への遷都、すなわち還都のことを意味する。この福原からの情報を、九条兼実が『玉葉』に記したのは治承四年（一一八〇）十一月五日のことであった。

還都の決断

これによって、かつて五月二十七日の高倉院御所における内議で、興福寺追討を申し合わせた人々のうち、藤原邦綱を除く全員、すなわち高倉院・藤原隆季・時忠、そして宗盛が還都論を唱えたことになる。嫡男までもが公然と還都を主張したのである。もはや遷都に固執する清盛は平氏政権内で孤立する状態となってしまった。

それから間もない十一月八日、「還都あるべき由」が延暦寺に伝えられたという噂を兼実は耳にする。彼はこれを山僧を宥める方便だろうと思っていたが、十日には「帰都の事、すこぶる沙汰あり」という情報があり、さらに翌日には、蔵人頭平重衡が「還都事」を人々に問わせたという連絡も届いている。

当時福原にあり、蔵人頭として政務の中枢に加わっていた藤原（吉田）経房の日記『吉記』によると、十一月十二日、高倉院御所に召喚された経房は、大宰帥隆季から「帰都の議あり」と告げられた。そして、

高倉院から邦綱が使者として清盛のもとに派遣されたという。しかし、清盛が抵抗したのか、容易に結論は出なかった。蔵人弁藤原行隆を通して「帰都一定」との報告が経房にあったのは、深夜になってからである。さすがに経房も急に信じることができず、清盛の娘婿でもある摂政近衛基通にも確認して「平京（平安京）に還御あるべし。早く申し沙汰すべし」との命を受けとったのである。

還都決定が公然と語られたのはこの時が最初であった。これ以後、若干の混乱もあり、直前まで「帰都のこと、いまだ定まらず」という噂も流れたが（『吉記』十一月二十二日条）、還都の方針は変更されることはなかった。新造内裏では、十七日に五節舞姫が参入し、翌十八日には殿上淵酔と御前試、十九日には童女御覧、二十日には豊明節会と、新嘗祭に関連する五節の華々しい儀式が行われている。短命に終わった新内裏にとって、唯一の晴れの舞台であった。なお、肝心の新嘗祭自体は十九日に京の神祇官で行われており、国家的な祭礼の場はついに福原に移されることはなかった。福原が首都として完成していなかったことを示すかたちとなった（『吉記』）。

晴儀が終わるのを待って、二十三日に安徳天皇以下平氏一門は福原を出立し、京に向かうことになる。天皇は方違のために、いったん宇治の邦綱の新邸に移り、二十四日に福原を出た。その日は小雨混じりの天候で、道路は泥が深く、落馬する者も多かったという。十分整備されたとはいえない福原の道路の様子が窺われる（『吉記』）。

この間、かつては還都派であったはずの時忠が難色を示したという噂が流れたり（『玉葉』十一月十六日条）、近江でも反乱が発生したため、還都を延期するという噂も流れた（同上二十四日条）が、さしもの清盛も、も

はや目立った反対を示すことはなかった。治承三年政変を実現し、さらに独裁を確立した清盛の、初めての挫折であった。

さて、こうして見ると、十一月初頭こそが清盛に深刻な動揺を与え、還都を決断させた画期であった。この時期に清盛に大きな影響を与え、還都を決断させた出来事といえば、東国追討軍が惨敗を喫した富士川合戦以外に考えられない。清盛・宗盛両者の口論の噂を伝えた『玉葉』のまさに同日条に、富士川合戦における官軍惨敗の詳報が記されているのである。追討使の惨敗、そして反乱の急速な拡大は清盛の遷都構想を根底から打ち砕いたのである。次に、この点も含めて還都の背景について検討することにしたい。

還都の背景

安徳天皇と平氏一門は、治承四年（一一八〇）十一月二十三日に福原を出立し、そして強風を衝いて二十六日に帰京した。この結果、六月初頭に以仁王（もちひとおう）の挙兵を直接の契機として清盛が強行した福原遷都も、わずか半年足らずで失敗に終わったのである。九条兼実は、その日記『玉葉』（十一月二十六日条）に、還都の理由として次の四点を挙げている。まず第一に、前年の院の幽閉に続き無謀な遷都を行ったために起こった関東の反乱が激化したこと、第二に平安京と結びつくことによって繁栄してきた延暦寺からの強硬な要求、第三に病状を悪化させた高倉院の還都の願いを無視できなかったこと、そして第四に清盛自身が積み重ねた悪事の重さを悔いたためであるという。また、

写真39　高倉上皇像（天子摂関御影）
（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

これらは兼実個人の感想ではなく、「天下の謳歌するところ」であった。このうち、貴族たちの希望的観測ともいうべき第四の理由はともかくとして、ほかの三点は今日でも還都の大きな理由と考えられているものである。

しかし、これらを還都の理由として、そのまま単純に認めるわけにはゆかない。まず高倉院や延暦寺の反対という点について検討してみよう。すでに触れたように福原が宮都化することが確実となった八月初め、高倉院や平時忠・藤原隆季らが清盛に対し還都の要求を突きつけたにも関わらず、清盛はこれを一言のもとに撥ねつけている。そればかりか、八月末には皇居に続き八省の造営までも決定し、宮都化を推進しているのである。また、九月に入って延暦寺から還都の要求が高まり、内乱の激化とともに居丈高となった面はあるが、やはり清盛はこれに対して動かされた様子はない。

元来、遷都は高倉院以下の在京派の反対を強引に押し切り、権門寺院の圧力から逃れるために強行されたのであるから、彼らから還都の要求が出されるのは当然のことといわねばならない。すなわち、清盛にとっては最初から予想されたことに過ぎず、こうした点を単純に還都の原因として大きく評価することには疑問があるといえよう。

こうしてみると、先にも述べたように兼実が第一の理由として指摘した反乱こそが還都の最大の原因と考えられる。十一月初頭に富士川合戦の敗報が伝わるや、清盛の嫡男宗盛までもが還都を主張して父と対立し、その清盛も急激に還都に傾いてゆくのである。したがって、富士川合戦の敗北が清盛にも大きな衝撃を与えて還都を決意させる要因となったことは疑いない。富士川合戦の敗北こそは頼朝の反乱の早期鎮圧を不可能

とするとともに、東国反乱の長期化・深刻化を決定付ける事件であった。さしもの清盛も遷都のためのさらなる大土木工事と、大規模な内乱鎮圧を並行させることは困難と考えたのである。

また、延暦寺の要求が清盛に還都を決意させる要因となったとしても、それは反乱の激化にともなって近江国の戦略的な重要性が高まった結果であった。したがって、還都の最大の理由はやはり反乱の激化だったのである。

さらに、東国追討に向かった平維盛以下の追討軍は、六波羅出立に際し、ここを本拠として日を選ぶべきとした侍大将伊藤忠清の意見で、日時を空費している（『山槐記』九月二十九日条）。このことは、平氏一門や家人（けにん）の間に、あくまで六波羅を本拠とし、福原遷都に反対する空気が強かったことを物語る。大規模な反乱鎮圧に際し、平氏の内紛は何としても回避すべき問題であった。ここにも、清盛が福原遷都を断念に追い込まれた一因があったと考えられる。

通説によると、還都は内乱の激化に動揺した清盛が貴族や寺社の反対に屈伏した結果であったと理解されている。たしかに、還都は遷都に反対した貴族・寺社の意向に沿ったものであった。しかし、還都後の清盛は、十二月の園城（おんじょう）寺・南都焼き討ちを始め、翌年正月に惣管、二月に丹波（たんば）国諸荘園惣下司を創設したように、反対勢力に対して徹底的な攻撃を加え、強力な軍事独裁体制を構築しているのである。はたして、還都を貴族・寺社に対する妥協とのみ考えてよいのだろうか。次に、還都後の政策も含めて、清盛の意図を考えてみることにしたい。

軍事独裁体制の構築

治承四年（一一八〇）十月の富士川合戦以後、反乱の火の手は一気に燃え広がり、すでに内乱状態にあった東国や九州だけでなく、翌月には近江や平氏知行国である若狭といった京に近接した諸国にまで及ぶに至ったのである。すなわち、還都を決意した当時の清盛は、こうした大規模な内乱に対応する軍事体制の構築を最大の課題としていたことになる。したがって、還都もかかる目的に沿った施策の一つであったと考えられる。

従来、以仁王の挙兵以来、各地で発生した反乱の鎮圧は清盛の私的な郎従を中心として遂行されてきた。また富士川合戦の追討軍の武力も主として沿道の平氏知行国から徴発されていたのである。このように富士川の敗戦に至るまで、追討は平氏のみが担当してきたもので、ほかの貴族等は傍観者的な立場にあったといえよう。しかし、内乱が同時多発的に全国に拡大し、さらに長期化が決定的となったために、もはや平氏単独で追討を続行することは困難となったのである。このため、清盛は貴族・寺社といった荘園領主の協力を不可欠としたのであり、ここに彼らの要求に従って還都した根本的な原因があったと考えて相違あるまい。

しかし、還都は決して清盛の貴族・寺社等に対する妥協・譲歩ではなかった。このことは、還都前後における清盛の施策には、貴族・寺社等の荘園領主を追討に協力させようとするものが目につく点から明らかである。たとえば、還都直前の十一月二十二日には福原の高倉院殿上において議定が行われ、天台座主明雲を通して近江国日吉神社・延暦寺の荘園に対し賊徒の防御・討伐を命ずることが決定されている（『吉記』）。また、還都後の十二月には公卿・受領・荘園領主に内裏警護の兵士の進上が命ぜられ、さらに諸国から知行国主を通して「兵乱米」が徴収されることになった（『山槐記』十二月十日条、『玉葉』十二月十三・十五日条等）。

このように、清盛は貴族・寺社の要求に応じて還都したが、同時に彼らを内乱鎮圧のための軍事体制に強引に組み込み、鎮圧のための人・物両面における負担・協力を要求したことになる。この点にこそ、清盛が還都を行った真の目的が存在したのである。しかも、それは清盛の独裁によって決定されたものであり、反抗すれば後述する園城寺や興福寺のように徹底的な弾圧が待ち構えていた。したがって、清盛の姿勢は強圧的なもので、決して妥協や譲歩などというべきものではなかったのである。

以上のように、還都は決して貴族・寺社の圧力に屈して行われたものではなく、内乱鎮圧のために貴族・寺社等の諸権門を強引に組織しようとする戦略的な目的から強行されたものであった。すなわち、福原遷都は権門寺院との軋轢を回避した緊急避難的な性格を帯びていたが、通常平氏政権の後退とされる還都こそは平氏が諸権門と正面からぶつかり、これを従属させようとした積極的な政策であったことになる。

さて、還都した清盛は、十二月に近江・南都を追討し、園城寺・興福寺以下を焼き討ちして京周辺の反対勢力を一掃するとともに、翌年の正月には五畿内以下九カ国を統括する惣管職を、そして翌二月には丹波国諸荘園惣下司職を設置し、京を中心とした諸国に対する強力な支配体制を構築したのである。これと並行して、左京南部の八条・九条付近に新たな平氏の拠点を形成しつつあった。すなわち、清盛は福原に代わり京の南部を新たな拠点とし、畿内を中心とする軍事政権として脱皮しようとしていたのである。

写真40　伝平清盛像
（六波羅蜜寺蔵）

しかし、かかる清盛の壮図も端緒の段階で挫折することになる。平清盛は治承五年閏二月四日、突然の熱病によって、その六十三年の生涯を終えてしまう運命にあった。

第二節　寿永の争乱

1　平氏政権の崩壊

清盛の最期

清盛の発病について、『吾妻鏡』治承五年（一一八一）閏二月四日条は、二月二十五日のこととしているが、同時代の記録に初めて見えるのは、『玉葉』同年二月二十七日条である。これによると、清盛の盟友藤原邦綱が「二禁」を患ったという報に続いて「禅門、頭風を病む」とあり、清盛は当初頭風、すなわち頭痛を発病したと伝えられていた。同書の翌二十八日条には「禅門の頭風、ことのほかに増あり」と記されており、心配になった兼実は二十九日に家司藤原基輔を見舞いに派遣している。

そして閏二月一日には「禅門の所労（病気）、十の九はその憑みなし」という情報が届けられるに至った。果せるかな四日には清盛死去の噂が流れ、五日にそれは確認されるのである。『吾妻鏡』（閏二月四日条）によると、清盛は「九条河原口の盛国家」で死去したとされる。この盛国は平氏一門で、清盛の家司として活躍した武将と考えられるが、一方では邦綱の父藤原盛国とする解釈もある。

このように、清盛は発病からわずか一週間ほどで逝去しており、まさに急死であった。彼が激しい発熱に

苦しみながら臨終を迎えたことは「あっち死に」したとする『平家物語』の記述からもよく知られているが、このことはより確実な史料からも裏付けられる。たとえば、歌人として名高い藤原定家の日記『明月記』は熱のために悶絶したという噂を伝えているし、日記類を編纂した『百練抄』も「身の熱、火の如し。世以て東大・興福を焼くの現報となす」と記しており、清盛が熱病で死去したことは疑いない。

清盛の遺言として「我が子孫、一人生き残る者といえども、骸を頼朝の前に曝すべし」（『玉葉』八月一日条）、あるいは「子孫、偏に東国帰往の計を営むべし」（『吾妻鏡』閏二月四日条）、「頼朝が首をはねてわが墓のまへにかくべし」（『平家物語』）といった言葉が伝えられているように、彼は最後まで源氏追討に対する強い執念を持ち続けていたのである。まさに戦いの最中に病に倒れ、激しい闘志をたぎらせながら無念の最期を遂げたといえよう。

さて、『平家物語』が荼毘に付された清盛の遺骨を円実法印が首にかけて経ヶ島に持参したと記しているため、兵庫区の清盛塚がその墓所と考えられたこともあった。しかし、大正十二年（一九二三）の発掘調査では遺骨が確認されず、この石塔の銘によれば建立も弘安九年（一二八六）であり、清盛との関係は不明確である。これに対し、清盛の墓所を示す史料としてより注目されているのが、「播磨国山田法花堂」に遺骨を納めたとする『吾妻鏡』（閏二月四日条）の記事である。

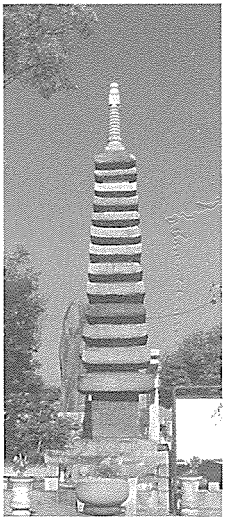


写真41　清盛塚（兵庫区）

この「山田」の地名比定については諸説があった

が、先にも取り上げた『高倉院厳島御幸記』にも見える播磨国山田であることは疑いない。先述のごとく、高倉院一行は同地の山荘で昼食を取っているし、延慶本『平家物語』には「山田御所」があったとされ、平氏にとって海陸の重要拠点の一つだったと考えられる。また、この地は現在の垂水区西舞子付近に当たり、淡路島と福原に入港する船舶を望む景勝の地でもあった。こうした点を考えれば、山田は清盛の墓所としてふさわしい場所といえよう。

清盛にとって京は、院や貴族・寺社と対峙する政争の場で、内乱鎮圧に明け暮れる地でしかなかった。清盛が永遠の安らぎを求める墓所は、やはり福原にしかあり得なかったのである。

宗盛と後白河

清盛の死によって、平氏政権の命運は嫡男の宗盛に委ねられることになった。彼は父の死去から二日後には「故入道の所行等、愚意に叶はざるのこと等ありといへども、諫争することあたはず。ただ彼の命を守り罷り過ぐる所なり。今においては、万事ひとえに院宣の趣を以て、存じ行ふべく候」と述べて（『玉葉』閏二月六日条）、父清盛の行動を否定するとともに、後白河に対する政権の返上を申し出るに至った。この結果、清盛に幽閉されて以来久方ぶりに、後白河は本格的な政界復帰を果たすことになる。また、八条に移っていた安徳天皇も閑院御所に帰り、八条・九条末を中心として整備されつつあった首都機能は解体するのである。こうして京の政界は、治承三年政変以前の政治体制に復帰するかに見えた。

しかし、宗盛には政権を全面的に返上する意志もなかった。六日の院御所議定で反乱鎮圧の一時休止の方向が打出されたにもかかわらず、弟の平重衡を下向させて武力によって追討させることを主張したのである。これに対し、院をはじめ貴族たちが大きな不満を懐いたのは当然であった。以後も宗盛以下は軍事面では院

命に従わず、独自の行動をとることになる。このように、宗盛は父の強硬路線を継承して院の政務を完全に封殺することも、また院に全面的に政権を返上することもできなかったのである。

再び京の政界の中心に立ち独自の活動を開始した後白河院が、かかる宗盛を信頼しないのも当然のことであった。だいいち頼朝の挙兵についても文覚を介した秘密の院宣の存在が想定されており（『平家物語』）、源氏は院にとっては単なる反乱軍ではなかったのである。養和元年（一一八一）八月初めに、頼朝から密かに奏上された和平案を宗盛に提示したのも、そのあらわれにほかならない（『玉葉』八月一日条）。院や貴族たちから見れば、諸国の源氏は後白河院の幽閉や福原遷都の強行といった清盛の悪政に抗議するために挙兵したもので、彼らを武力で追討しようとする平氏の行動は私戦というべきものであった。こうして、平氏は次第に後白河以下の貴族政権から遊離し、院や貴族から見放された都落ちという運命を招くことになる。

さて、清盛が死去した直後の三月、平氏が美濃と尾張の国境である墨俣川で源行家以下の源氏を破って以来、頼朝が東国経営に専念したこともあって東海道の戦線は膠着することになった。一方、六月に越後の平氏方豪族城氏が木曽義仲に敗北して以来、北陸道の反乱が激化し、九月には追討軍が惨敗を喫したために安徳天皇以下の西走の噂まで流れている（『玉葉』九月十六日条）。その目的地は福原ではなく、おそらくは寿永二年（一一八三）の都落ちのように大宰府を念頭においたものであったと考えられる。

しかし、全国的な飢饉のために、翌年にかけては源平双方とも軍事行動は見られない。こうした情勢に大きな変化が生まれるのは、寿永二年のことである。平氏は摂津以下畿内や播磨以下の山陽、九州等の諸国から十万余と言われる大軍を徴発し、京の糧道である北陸道の平定・確保を目指した。ところが、乾坤一擲を

目指した追討軍は五月の砺波山合戦・篠原合戦で惨敗し、逆に義仲以下の大軍が京に向けて進撃することになったのである。六月に九州から救援のために上洛した肥後守平貞能の軍勢もわずか千騎に過ぎず（『吉記』六月十八日条）、もはや義仲をくい止めることは絶望となった。

かかる情勢を見て、京周辺の諸国でも平氏を見限った武士の蜂起が見られたが、かつて鹿ケ谷事件を密告したとされる多田行綱もそうした者の一人であった。彼は摂津・河内両国を横行して種々の悪事を働き、河尻の船を奪い取ったという（『玉葉』七月二十二日条）。こうした騒然たる情勢下、七月二十五日、ついに平氏は鎮西を目指して都落ちすることになるのである。

2　平氏都落ち

都落ちの背景

先にも述べたが、かつて治承三年政変に際して、清盛が中宮徳子以下を擁して鎮西に下ると

いう噂が流れたことがあった。すなわち、平氏にとって大宰府は福原・厳島等と並ぶ重要拠点であり、政権所在地の候補の一つでさえあったといえよう。また、右に記したように養和元年（一一八一）に北陸道の反乱の激化した頃から西走の噂が頻繁に流れていた（『玉葉』九月十六日・十九日条）。その時に宗盛は、東国の源氏が都に迫るような事態になれば西国への退去もあり得ることを貴族たちに示唆していた（『玉葉』九月二十九日条）。こうしてみると、大宰府は中央の政争で敗退した際の緊急避難の場所として、古くから構想されていたことになる。

また、清盛・頼盛が大宰府の事実上の長官大弐に就任して、府官原田氏等鎮西の有力武士を家人化していたし、また治承四年（一一八〇）に発生した菊池氏以下による反乱も、清盛の腹心平貞能によって平定されたばかりであった。すなわち、大宰府は平氏にとって安住の地であり、退勢を立て直す絶好の拠点と考えられていたに相違ない。したがって、鎮西への下向は、兵粮の調達も困難な上に、義仲の大軍や諸源氏、権門寺院の悪僧をはじめとする叛徒の蜂起に囲繞された京からの戦略的退去という意味を有していたのである。

しかし、総帥宗盛は都落ちに際して決定的な失策を犯していた。それはいうまでもなく後白河院の同行に失敗したことである。元々平氏の監視下にあった後白河は、寵愛する摂政近衛基通の密告によって危機を察知し、安徳天皇の行幸が行われた隙に僅かな供人を連れて延暦寺に脱出した。清盛に対して激しい憎しみを抱き、したがって宗盛以下の平氏を信頼せず、また源氏を賊軍とは考えていない後白河にとって、都落ちする平氏一門からの脱出は当然の行為であったといえよう。

一方の宗盛は、自らを貴族政権の擁護者と考えていただけに、後白河の脱出は全く予想外のことだったに相違ない。このことは、彼がはるか後になって後白河の脱出を知ったことからも明らかである。老練の政治家後白河を信じて疑わなかった点は、まさに清盛の庇護の下で修羅場を知らずに成長した宗盛の人間的な甘さの現れといえるのかもしれない。しかし、その結果は重大なものであった。

すなわち、後白河を同道できなかったことは、平氏一門にとって文字通り致命傷となったのである。たしかに平氏は安徳天皇と三種の神器を擁してはいた。しかし、元来皇位の正当性に疑問を抱かれた安徳の権威によって、都落ちした平氏が自己の立場を正当化することは困難であった。この結果、前日まで官軍であっ

た平氏は賊軍となり、追討の対象に転落することになる。逆に、後白河が脱出した結果、それまでの事態の責任はすべて平氏に転嫁され、貴族政権は免罪されるとともに、源平争乱において局外中立に位置づけられることになったのである。

それはともかく、六波羅や西八条にあった邸宅を焼払った平氏一門は、清盛の弟頼盛一族などの脱落者を出しながらも翌日には福原に到達した。

福原炎上

福原における一門のありさまは『平家物語』に詳細に描かれている。もっとも、その内容は諸本によって異なっているし、ほかの史料から傍証することが困難であるために記述の信憑性に問題はあるが、同書に見える逸話をいくつか紹介しておこう。

まず、覚一本によると到着後ただちに宗盛と母時子は郎従たちを集めて一行の結束を説いたが、これに対し郎従たちは「新羅・百済・高麗・荊旦、雲のはて、海のはてまでも、行幸の御供仕て、いかにもなり候はん」ことを誓ったという。一方、延慶本では、まず福原に到着した一門の人々が清盛の墓所に参詣したことを記し、ついで清盛の弟で横笛の名手である修理大夫経盛が、彼を慕って福原まで同行してきた左京大夫能方に秘曲を伝授した逸話を載せており、右のような宗盛の演説はその後のこととして記されている。

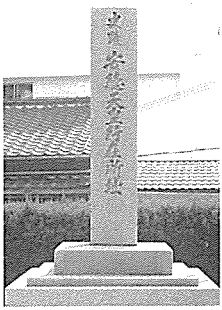


写真42　安徳天皇行在所跡の碑(兵庫区)

こうした逸話に続いて『平家物語』は、かつては華麗さを競った福原の御所・邸宅群が荒廃した様を描いている。御所・邸宅等の名称は諸本で若干の異同があり、覚一本は「春は花みの岡の御所、秋

は月見の浜の御所、泉殿・松陰殿・馬場殿、二階の桟敷殿、雪見の御所・萱ノ御所」の名称を挙げ、さらに「人々の館共、五条大納言邦綱卿の承って造進せられし里内裏、鴛（おしどり）の瓦、玉のだゝみ」等がともに荒廃していたことを記す。

一方、延慶本に見える建築は「花見ノ春ノ御所、初音尋ネル山田御所、月見ノ秋ノ岡ノ御所、雪ノ朝ノ萱ノ御所、嶋ノ御所、馬場殿、泉殿、二階桟敷」、そして邦綱が造営した里内裏や人々の館であった。もちろんこれらの名称には語呂合わせの側面があり、全面的に信用することはできないが、遷都によって栄華を誇った頃の福原の光景を彷彿とさせる叙述といえよう。

しかし、一門の人々には感傷に耽っている暇などなかった。都落ちの翌日には、すでに平氏は賊徒に転落していた。そして、後白河院は平氏に対する追討を命じ、例の多田行綱に対して三種の神器の奪回を命ずる御教書（みぎょうしょ）を下していたのである。兼実はかかる院の強硬策を非難して、中宮徳子または平時忠との交渉によって天皇・神器奪還を図るべきであるとの意見を記している（『玉葉』寿永二年七月二十六日条）が、ただちに平氏を賊徒として追討対象としたところに、院の平氏に対する憎しみの深さが現れているといえる。

したがって、平氏一門には福原に長く留まる余裕などあろうはずもなく、一夜を過ごしたのち思い出深い福原の建物に火を放つとともに海路西海を指して落ちていった。なお、『兵庫県史』では、福原落ちに際して山田にあった清盛の遺骨も持ち去られた可能性が高いとしているが、首肯すべき説である。かくして、六波羅・西八条に続いて福原でも、清盛の栄華を物語る壮麗な建築群が紅蓮の炎とともに灰塵に帰したのであった。

当初の目的地大宰府に逃れた平氏だったが、ここも彼らには決して安住の地ではなかった。

平氏の再起

寿永二年（一一八三）十月、後白河の意を受けた豊後の知行国主藤原頼輔が、同国の武士緒方惟義に命令して大宰府を急襲させたため、平氏一門は急遽豊前柳浦に逃れ、ついで讃岐の屋島に向かうことになった。そして阿波の武士田口成良以下の協力を得て、ようやく同地を拠点とすることができたのである。

一方、京を占領した義仲は、九月二十日に後白河の命を受けて平氏追討のために西海へ下向することになった。しかし、義仲軍は元来烏合の衆で軍規も乱れがちであったし、兵糧米も不足していた。その上一旦帰服した妹尾兼康が義仲を裏切ったように、この地方の武士の多くは依然として平氏に心を寄せており、おまけに不慣れな海上戦闘を余儀なくされたこともあって義仲の不利は免れなかった。

したがって、再起の態勢を整えつつあった平氏にとって、西下してきた義仲軍は敵ではなかった。両軍は閏十月に備中国水島において衝突するが、この合戦で義仲方は主要武将の足利義清や海野幸広等を失うという大敗を喫するに至った。このために、京では「およそ美作以西、しかしながら平氏に靡きおわんぬ。ほとんど播磨に及ぶと云々」という情報が流れ、しかも追討の戦果を挙げることができない義仲と平氏の結託までが噂されるありさまであったという（『玉葉』閏十月二十一日条）。

こうして義仲による追討が失敗に終わった後、当初義仲と共同歩調をとりながら次第に義仲との対立を深めていた叔父源行家が、十一月八日に単独で平氏追討のために下向することになった。おそらく義仲が失敗した平氏追討を成功させることで政治的地位を逆転させようとしたものと考えられる。しかし、彼も播磨国室山で平氏に惨敗し、多くの戦死者を出して命からがら和泉国に脱出したのである。

一方、上洛以来の義仲軍による乱暴狼藉に業を煮やしていた後白河院は、義仲が京を留守にして西国で苦闘している間に鎌倉の源頼朝と交渉を進めていた。そして十月には、頼朝が東国の荘園・国衙領からの年貢を従来通りに納入すると申し出たのに応じて、これと引換えに頼朝の本位への復帰、東海・東山両道の支配権を認めるに至ったのである。このことを伝えた宣旨を「寿永二年十月宣旨」と称し、ここで初めて頼朝の武力が公家政権に公認されたことから、幕府成立の大きな画期の一つと考えられている。

この宣旨において後白河院は、当初義仲の本領である北陸道に対する頼朝の支配権さえも認めていたのである。これはさすがに義仲を恐れて撤回されたものの、この事実は後白河が頼朝を源氏の嫡流と見なしたこと、そしてすでに義仲を見限って頼朝に依拠する姿勢を示したことを物語っており、当然義仲を強く刺激することになる。そして、ついに十一月十九日、義仲は院御所法住寺殿を襲撃して院を幽閉するとともに、院の近臣はもとより、悪僧とともにかけつけた天台座主明雲や園城寺長吏円恵法親王を殺害、さらに摂政基通を解官し義仲と親しい基房の子師家を強引に摂政に擁立したのである。まさに清盛が惹起した治承三年政変の再現であった。

しかし、この事件は頼朝に上洛の口実を与える結果ともなった。すでに頼朝は代官として弟範頼・義経を京に派遣し、義仲を攻撃する態勢を整えていたのである。平氏追討の成果をあげることもできず、しかも院と衝突した上に、頼朝からも圧力を受けるに至った義仲から、行家以下の有力武将たちが次々と離反してゆくのも当然であった。もはや孤立した義仲に従う軍勢は僅かに過ぎなかったのである。

年が明けて義仲は征東大将軍の称号を得たものの、それも束の間、範頼・義経軍が瀬田・宇治の二方面か

ら京に突入したため、義仲は北陸への脱出を図ったが、ついに近江国粟津で戦死するに至った。時に、義仲は三十一歳であった。

このように、源氏が京において激しい骨肉の相剋を繰り広げる間隙を衝いて、再起した平氏は軍を東上させて、ついに前年の七月の都落ちから半年ぶりに摂津福原の拠点を回復することになったのである。

3　一ノ谷合戦

合戦前夜

木曽義仲による法皇幽閉、それから二カ月後の義仲自身の敗北・滅亡と中央の政局が目まぐるしく展開する間に、なんら抵抗を受けることもなく平氏一門は福原の旧地を回復した。彼らが福原に到着したのは、『百練抄』によると寿永三年（一一八四）正月八日のことであったという。また、『玉葉』二月四日条によると、平氏は安徳天皇を奉じており、九州勢はまだ到着しないものの、四国・紀伊の軍勢数万騎を従えており、来る十三日には間違いなく入京すると噂されていた。

一方、義仲を滅ぼした後白河院は、入京を目指す平氏に直面することになった。義仲が討たれた二日後の二十二日、院の下を訪れた右大臣九条兼実以下に、「直ちに平氏を討伐するべきところだが、三種の神器が彼らの手にあり、どうすればよいか。また朝廷の使者を追討使に同行させてはどうか」といった諮問があった。これに対し兼実は「神器の安全を考えるのでしたら、たちまちに追討するのはよろしくございません。特別の使者を遣わして説得されるべきでしょう」と答えている。しかし、前日諮問に答えた左大臣藤原経宗

や左大将実定等は神器を考えずに追討を強行すべきことを主張しており、実はそれが後白河院の意志でもあったのである（『玉葉』）。

その後、追討を強行するか否かについては決定を見ず、二十六日には信西の子で院の側近であった僧静賢を和平の使者として下向させる案も出たが、二十九日には追討使下向が決定したため、静賢は追討を前提とするならば使者として下向することは道理に叶わないとして辞退してしまった（同上）。しかし、実際に源氏軍が下向したのは二月四日であったとされ、下向が決定してから実行まで若干時間があった。この背景には、頼朝の命令で範頼・義経に随行していた頼朝の腹心土肥実平や中原親能たちが使者によって説得する方策に関心を示したとされる（同上二月二日条）ように、頼朝軍の消極的な姿勢も関係していたごとくである。当時の京では平氏が数万騎に及ぶと噂されたのに対し、二手に分かれた源氏勢はそれぞれ一～二千騎（同上二月四日条）、総勢でも二～三千騎と称されており（同上二月六日条）、源氏の勝ち目が乏しいと見られたことも影響したのではないだろうか。

しかし、これと対照的に藤原朝方・同親信・平親宗といった院近臣たちは即時追討を強硬に主張していたが、これが院の「素懐」（真意）であったとされた（同上二月二日条）。院は一貫して強硬な平氏追討論を主張していたことになる。元来、清盛による幽閉以来、後白河院の平氏に対する不信と憎悪は激しいものであったし、また都落ちに際して平氏を裏切って脱出したことに対する報復も十分想定された。こうしたことから、院は神器の安全な奪還を顧慮せず、しかも源氏軍不利の噂も無視して、追討を強行しようとしたのである。このことが、後にふれるように和平の院使が下向するためにしばらく源氏の軍事行動を停止したという偽の

書簡が平氏にもたらされるという「奇謀」（『吾妻鏡』二月二十日条）が仕組まれる一因ともなったと考えられる。

さて、後白河院の命を受けた源氏軍は、二手に分かれて平氏を攻撃することに決定し、範頼の軍勢が大手として摂津を通って福原の東の木戸口である生田森に向かい、義経の軍勢は搦手として丹波（たんば）を経由して西の関門である一ノ谷に向かうことになった。そして、両軍はともに四日に京を出立したという（『玉葉』）。延慶（えんきょう）本『平家物語』によると、彼らは攻撃開始の日程について話し合い、四日は清盛の命日でもあり仏事を妨げるのは罪が重いし、また五日・六日は日が悪いとして、七日卯の刻（午前六時頃）に「東西木戸口で矢合わせ」（攻撃開始）と決定したと伝えられる。かくして、寿永三年二月七日、一ノ谷合戦が勃発することになる。

両軍の衝突

以下、両軍の衝突については『吾妻鏡』『平家物語』に詳細な叙述がある。周知の通り『平家物語』は文学作品ゆえに多くの虚構が含まれている。また鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』も『平家物語』の強い影響を受けているとされており、これらの叙述には疑問が多い。以下ではそれらを一応紹介し、疑問点についてふれることにしたい。

合戦直前の平氏の様子を記しているのは『平家物語』である。覚一本によると、平氏は一ノ谷を城郭として西の備えとするとともに、生田森を東の木戸口とし福原・兵庫・板宿・須磨に南海・西海一四カ国の軍十万騎を駐屯させていたという。一ノ谷は「北は山、南は海、口はせばくて奥ひろし。岸たかくして屏風をたてたるにことならず」という要害の地で、さらに同所には「北の山ぎはより南の海のとをあさ（遠浅）まで、

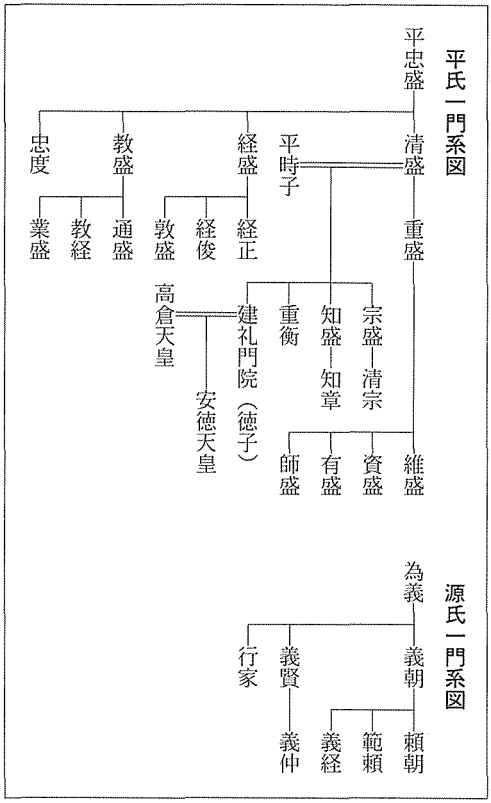


図46　一ノ谷合戦関係系図

大石をかさねあげおほ木をきってさかも木にひき、ふかきところには大船どもをそばだてて、かいだて（垣楯）にか」くという厳重な防御を設け、そこには四国・九州の一騎当千の強者が雲霞のごとくに居並び、天に翻る赤旗は火炎の燃え上がるようであったとしている。

これに対する源氏軍について、『吾妻鏡』と『平家物語』に類似した叙述がある。『吾妻鏡』二月五日条によると大手の範頼に従う武士は小山朝政・武田有義・板垣兼信・下河辺行平・長沼宗政・千葉常胤・畠山重忠・梶原景時以下五万六千騎（『平家物語』は五万騎、畠山重忠は搦手とする）、搦手の義経に従う武士は安田義定・大内惟義・山名義範・中原親能・土肥実平以下二万騎であったとされる。なお、『平家物語』は義経軍を一万騎とし、最後に武蔵房弁慶の名も見えるのはご愛嬌である。もっとも、これらの記述をそのまま信用すると、源氏軍も六〜七万騎余りに及んでおり、一ノ谷合戦では双方で十数万の大軍が衝突し、のちの関ヶ原合戦にも匹敵する規模で

あったことになってしまう。

しかし、実際には先述したように『玉葉』（二月四日条）によると、京を出立した源氏軍は大手・搦手ともに一～二千程度に過ぎないとされている。史料の性格からみてもこの数値は実数に近かったと考えるべきであろう。したがって、途中から合流した武士があったとしても、源氏軍はせいぜい数千騎程度と見られる。一方の平氏を『玉葉』は数万騎としたが、これは攻め上ってくる平氏の脅威を強調した表現で、おそらくは源氏軍の数を大きく超えるものでなかったと考えるべきである。そうでなければ、後述するようにわずかな時間で合戦の帰趨が決定するとは考え難い。

さて、源平両軍の最初の衝突は二月五日、播磨国三草山において搦手の義経軍と平資盛率いる平氏軍との間で発生した。資盛・有盛・師盛の兄弟は亡き重盛の子供たちで、当時の平氏では傍流の存在となっていた。源氏軍の下向を聞いて、防御のために急遽三草山の西に陣していたのである。義経は伊豆の武士田代信綱等の意見を容れて敵の意表を衝いた夜討を行ったという。このため平氏軍は大敗し退却したが、『平家物語』によると、大将の資盛は面目を失って福原にも帰らず、高砂から海路屋島に逃れたという。なお、延慶本では資盛が「小馬ノ林」から淡路に脱出したとされるが、すでにふれたように小馬ノ林は和田岬に程近い場所で、当時の平氏軍主力の陣地の一角に含まれていたのである。したがって、平氏首脳と対面せずにここから船出することは困難で、地理的に見ても覚一本の記述の方が合理的といえよう。

戦闘の経緯

『吾妻鏡』二月七日条によると、三草山の平氏守備隊を蹴散らした義経は軍を二手に分け、義経自身は七十騎ほどの軍勢を率いて鵯越に向かうことにして、西の木戸口の攻撃を土肥実

図47　一ノ谷合戦関係地図（『兵庫県の地名』付録輯製二十万分一図に加筆）

平が率いる一隊に任せた。『平家物語』は義経の軍勢について、覚一本では三千騎、延慶本に至っては七千騎とするが、むろん『吾妻鏡』が実数に近いものと考えられる。

『平家物語』によると、実平は垂水に抜け、七日未明に一ノ谷に攻撃を開始した。そして前夜から先駆けを目指していた武蔵武士熊谷直実父子や平山武者所季重以下が、平氏の築いた大木や逆茂木等を乗り越えて一ノ谷の城郭に殺到し、これを平氏の家人飛驒三郎

景綱・越中二郎兵衛盛次・上総五郎兵衛忠光以下が迎え討った。ここにいわゆる一ノ谷合戦の火蓋が切って落とされたのである。そして直実の男直家が負傷し、季重の郎従が討たれたが、まもなく実平以下の本隊が参戦し、激戦となったという。

一方、大手の範頼軍の動向については、『平家物語』にのみ記述が見られる。これによると、彼らは五日夜に昆陽野に陣取り松明を掲げたが、これを見た平氏軍も遠火を焚いて迎え討つ準備を整え、両軍の間の緊張は高まった。そして七日未明、範頼軍は生田森に対する攻撃を開始し、まず先陣として武蔵の武士河原高直・盛直兄弟が突入したが、奮戦虚しく平氏に討ち取られた。先の熊谷・平山等と同様、河原兄弟もわずかな郎従を率いるに過ぎない弱小な武士たちであった。彼らは、自身の戦功を頼朝に認めさせて恩賞に預かるために、危険を冒して敵陣に突入することも辞さなかったのである。こうした行動を見た平氏は「東国の武士ほどおそろしかりける者はなし」と称したが、この言葉には恐怖心と同時に無謀さに呆れる感情が入り交じっていたといえよう。

河原兄弟の討死にを見た梶原景時も、五百騎ほどの兵とともに敵陣に突入し、一旦は退却したものの、平氏に包囲された子息景季を救出するために再度突入を果たし、「二度の先駆け」と称される一幕もあったという。

なお、『吾妻鏡』寿永三年（一一八四）三月五日条によると、一ノ谷合戦において武蔵国住人藤田三郎行康という者が「最前に進出」しながら討ち取られたため、頼朝はその遺領を子息小三郎能国に安堵することを命じている。この記事に従えば、東西いずれの木戸口かは不明であるが、行康こそが先陣であったことになる。おそらく記録や文学作品に残らないものの、先陣争いに加わった武士はほかにも少なくなかったことで

あろう。

さて、先陣をめぐる小競り合いの後、両軍入り乱れての激戦が続くことになった。『吾妻鏡』二月七日条によると、「源平の軍士等互いに混乱し、白旗・赤旗色を交う。闘戦の体たらく、山に響き地を動かす。凡そかの樊噲（はんかい）・張良（『史記』に見える中国古代の英雄）といえども、たやすく敗績しがたきの勢なり」というありさまであったという。『平家物語』諸本の記述もほぼ同様である。

こうした状況を一気に源氏有利の形成に変えたのが、義経の奇襲であった。『吾妻鏡』は、彼の軍勢が鵯越に到着した時刻を、まだ夜も明けない寅の刻（午前四時頃）であったとする。そして、合戦がたけなわとなった頃、義経率いる七十騎ばかりが鹿・猪・狐の類しか通りえない獣道を経て、平氏の陣中を急襲した。いわゆる鵯越の逆落しである。『平家物語』では「坂落し」と表記し、義経軍の人数も先述のように三千（覚一本）、七千騎（延慶本）としている。これによって平氏は度胆を抜かれて総崩れとなり、合戦は一気に源氏の勝利となったとする。

以上の大筋については、人数や人物の相違はあるものの、『吾妻鏡』も、『平家物語』もほぼ同様である。しかし、先述のように今日では両書に関する史料批判が進んでおり、地名などの混乱や誤記が多い両書の叙述をそのまま事実とすることは困難である。たとえば、鵯越の地名は兵庫区に残っているが、地理的に合戦の主戦場とは異なっているため、逆落しの場所についても諸説が錯綜している。さらには逆落し自体を虚構とする説も提起されている。

これに対し、合戦についての情報は右大臣九条兼実の日記『玉葉』二月八日条にも記載されている。兼実

写真43　源平合戦図屏風　一ノ谷合戦図（兵庫県立歴史博物館蔵）

は、まず藤原範季から梶原景時の飛脚の報告を伝えられたのに続いて、藤原定能から義経、そして範頼の飛脚が伝えた合戦の詳報を聞いている。それらによると、合戦は辰の刻（午前八時頃）に始まって巳の刻（午前十時頃）に及んだが、ほどなく平氏を攻め落としたとしており、意外と短時間であった。このことは合戦の軍勢が小規模であったことを傍証するものといえよう。

また、「多田行綱、山方より寄せ、最前に山手を落とさる」という記事があり、最初に山手からの奇襲を仕掛けて平氏を混乱させたのは多田行綱であったというのである。行綱は一ノ谷合戦の開始前に義経の命を受けて武士を招集していたとされ（『儒林拾要』）、合戦に参加したことは疑いない。地元に精通した行綱が、一ノ谷合戦で大きな役割を果たしたことは十分想定しうることである。

ここで注目されるのは、南北朝時代の建武三年（一三三六）に発生した湊川合戦において足利尊氏の武将斯波高経が攻め込んだ場所を『梅松論』は「鵯越」、『太平記』は「山の手」としている点である。すなわち、「鵯越」と「山手」は同一の場所と見られ、行綱こそが鵯越を突破した武将だった可能性が高い。高経は三木から夢野に抜ける

街道を通過したとする説が有力で、行綱も同じ経路を辿ったのではないだろうか。行綱は『平家物語』において、鹿ケ谷事件の密告者となる怯懦な武士という役割を与えられていた。このため、同書やそれを参照した『吾妻鏡』において、彼の功績が抹殺されたものと考えられる。

一方、『玉葉』二月八日条には、大手の範頼が福原に「寄せ」たとあるのに対し、搦手の義経が一谷を「落と」したと記されており、義経が一ノ谷を突破したことが窺われる。逆落しの有無はともかく、義経の一ノ谷攻略が合戦の帰趨を決した面があったことは疑いない。このために、合戦が生田森から一ノ谷に至る広範囲で展開されながら、「一ノ谷合戦」という名称を付されたのである。また、『平家物語』は義経を超人的な武将として描いているが、その一環として一ノ谷合戦における義経の活躍も肥大化され、行綱の事績などを含みこみながら、勝敗を決する逆落しの物語が生成されたものと考えられる。

しかし、『玉葉』には城郭が焼かれて立てこもった兵士はすべて殺害され、海上の船の多くも焼き討ちされて宗盛も焼け死んだのではないかとする噂も記載されている。このように、合戦直後の伝聞に基づく記述だけに、情報にはかなり混乱も見られる。

いずれにしても平氏が大敗を喫したのは事実である。総崩れとなった平氏の将兵たちは争って沖合の船に逃れるが、その途中で一門の多くが源氏の武士によって討ち取られることになり、平氏は大きな打撃を受けるのである。

平氏一門の悲劇

この合戦では敗走の最中、多くの平家方の公達が討たれた。『平家物語』は、清盛の腹心であった平盛俊が源氏方の猪俣則綱の騙し討ちにあった逸話をはじめ、清盛の末弟忠度の最期、清盛

写真44　小敦盛絵巻　敦盛の最期（神戸市立博物館蔵）

の子で平氏一門の中心の一人であった本三位中将重衡が郎従の裏切りから生け捕りとなる顛末、そして有名な若武者敦盛が熊谷直実に討たれた悲話、さらに知盛の身代わりとなったその子知章、自害しようとするところを敵に取り囲まれて討たれた通盛、小舟に乗りながら知盛の郎従を助けようとして溺れ討たれた師盛等の非業の最期を綴っているのは周知の通りである。

『吾妻鏡』二月十五日条によると、重衡が捕虜となったほか、各部隊が討ち取った主要な平氏一門は次の通りであった。まず範頼の手勢は通盛・忠度・経俊を、また遠江守安田義定の手勢は経正・師盛・教経を、そして義経の手勢は敦盛・知章・業盛・盛俊を討ったとしている。甲斐源氏の武将義定が一方の大将と位置づけられており、すべての源氏軍が範頼・義経の下に統制されていなかったことがわかる。それはともかく、このうちの教経は『平家物語』では戦場を脱出したことになっていて、壇ノ浦合戦における活躍が描かれている。また『玉葉』にも、彼の首を偽物とする説が紹介されている（二月十五日条）。このため一ノ谷で討死にしたか否かについては疑問がある。

ところで、重衡はともかく、ここで討たれた人々の多くは一門の傍流に属しており、彼らが危険な前線に配置されていたことを物語っている。し

写真45　平知章の碑
（長田区）

たがって安徳天皇はもちろん、宗盛・知盛をはじめとする一門の中心は依然として安泰であり、再び屋島に拠った平氏が完全に再起不能に陥ったわけではない。

しかし、『平家物語』にもあるように、一ノ谷合戦に参加した軍勢の多くが平氏東進の趨勢に従った「かり武者」によって占められていただけに、合戦の大敗は平氏に対する彼らの信頼を喪失させ、離反を招くことになった。同時に、平氏の上洛を撃退した頼朝軍は畿内の支配を確立させて、その政治的地位・権威を大きく増大させたのである。元来平氏に属した京・畿内周辺の武士たちも頼朝軍に従属するのは当然であった。もはや平氏が源氏を武力で圧倒することは困難となったのである。したがって、この合戦の敗北によって平氏は中央に返り咲く可能性を失ったといってよい。

こうして見ると、以後の平氏に残された道は、切札である三種の神器と安徳天皇の帰還を交渉の手段として、名誉ある和平の道を探るしかなかったのである。捕虜となって都に戻った重衡は、さすがにこのことを察知していた。彼は二月十五日、前左衛門尉重国を使者として屋島の兄宗盛に遣わして和平の必要を説いたのである。

しかし、これに対する宗盛の反応は厳しいものであった。先述したように彼は後白河院の「奇謀」を激しく責めたのである。宗盛の返書（『吾妻鏡』二月二十日条）によると、二月六日に院近臣修理権大夫（修理大夫藤原親信か）からの書状があり、それには「和平の議が起こり、八日に院の使者として下向する予定で、

安徳天皇の返答を京に伝えるまでは源氏の軍事行動も制止した」という内容が記されていた。これを聞いた平氏が勅使を待っていたところへ、思いもかけず源氏が攻撃を加えたというのである。これを事実とすれば、書状が合戦の勝敗にある程度の影響を与えたことは疑いないだろう。宗盛は、このことを「奇謀」と称すとともに、安徳天皇と三種の神器の帰京を阻んでいるのは院自身だとして、激しい非難を浴びせたのであった。

たしかに、合戦に際して院の謀略があったのは事実であろう。しかし、源氏軍の進撃を平氏が知らなかったとは考えがたく、敗北した宗盛の言い訳のような面もある。また、すでに都落ちにおける脱出など、院から手痛い仕打ちを受けながら、ここに至ってなお院近臣の書状を信用したとすれば、宗盛は信じがたいお人好しと言わなければならない。少なくとも「奇謀」が合戦の帰趨を決めたとする解釈は疑問といえよう。

この書状の中で、宗盛は源氏に対し意趣のないことを述べて和平を申し入れ、天皇と神器の無事入京に院が協力することを要請しており、京でも和平提案として受け止める動きもあった（『玉葉』三月一日条）。しかし、院にこれに応ずる意志があったとは思えないし、一ノ谷合戦に勝利を収め全国を軍事的に制圧する可能性が高まった頼朝も、この段階で和平に応ずることはあり得なかった。

そして、すでに宗盛自身も再三の院の裏切りによって、もはや名誉ある降伏の道が閉ざされていることを知り、滅亡の覚悟を決めていたのではなかったか。事実、これ以後の平氏は切札ともいうべき安徳・三種の神器を和平の交渉に使うこともなく、屋島合戦を経て壇ノ浦合戦における軍事的敗北によって、悲劇的な滅亡を遂げることになる。それは一ノ谷合戦からわずか一年余りのちのことであった。

第三節　鎌倉幕府の成立

1　平氏の滅亡

一ノ谷合戦の結果

一ノ谷合戦は頼朝の覇権と平氏の没落を決定的とした合戦であった。この合戦に勝利を収めた源氏軍は、これ以後京・畿内を軍事占領して公家政権・荘園領主と対峙するとともに、屋島に落ちた安徳天皇と三種の神器を奪回すべく、平氏追討の戦いを遂行することになったのである。

さて、範頼・義経以下の源氏軍は、捕虜となった平重衡（しげひら）と一門の首を伴って一ノ谷の戦場から京に引き上げた。ここで一門の首の処遇が問題となった。すなわち、さすがの後白河院も、先日まで高位高官を占めて近侍していた平氏一門の首をさらし者にすることは反対であった。また公卿たちの多くも、一門は公卿を出した上に天皇の外戚でもあったし、依然安徳天皇・三種の神器が平氏に掌握されている以上、残った一門を刺激するべきではないという判断から、大路に首を渡すことに反対していた。

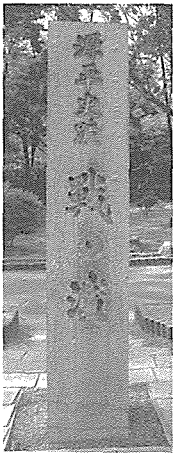


写真46　戦の浜の碑（須磨区）

しかし、範頼・義経は正月に討たれて首をさらされた義仲の場合と同様の措置を強要し、結局院もその要求に従わざるを得なかった。当然、範頼・義経は、かつての平治の乱において獄門にさらされた父義朝の運命を思って、報復の意図を有していたのであろう。こうして二月十三日、平氏一門の首は義経の六条室町邸に集められ、公卿であった通盛の首も含めて検非違使の手で京に渡され、獄門にさらされたのである。

一方、二月十五日、鎌倉で一ノ谷の勝報を聞いた頼朝は、十八日に早速朝廷に使者を送り、京中を警護するとともに、播磨・美作・備前・備中・備後の五カ国に梶原景時と土肥実平の両者を「守護」として派遣した（『吾妻鏡』二月十八日条）。むろんこれは後のように制度として整った役職ではなく、平氏と対峙する最前線において文字通り守護するために配備されたものである。このうち播磨は景時が守護を担当しているが、彼は正治元年（一一九九）に失脚するまで同国の軍事・警察権を掌握することになる。

ついで頼朝は書状を院の側近である高階泰経に送り、四カ条の政治的要求を伝えている（『吾妻鏡』二月二十五日条）。頼朝はまず最初の条文で院に対して、東国・北国諸国に受領を補任して内乱の荒廃からの復興を促進するように求め、これを徳政と称した。このことは、彼が支配下の民政を公家政権に返還したことを意味する。

第二番目の条文では、今後の平氏追討は義経が「畿内近国の源氏・平氏を号し弓箭に携わるの輩ならびに住人ら」を統率して担当すること、そしてその勲功賞は頼朝に一任するように院に申し入れている。「弓箭に携」わる輩とは武士を意味するから、義経は多田行綱のような畿内周辺の源氏、あるいは平氏の家柄に属する武士を統率して平氏を追討することになったのである。このことは、一ノ谷合戦における多田行綱らの

活躍が大きなものであったことを物語る。しかし、その恩賞推挙権は頼朝が掌握すると表明しており、西国の武士も頼朝のもとに統制し、軍事力を独占しようとする意図が明らかといえる。

また三番目の条文では定められた神事の励行を、そして四番目の条文では僧徒の武装解除と仏事への専念を要求している。源平争乱期には悪僧の軍事的活動が目立つが、頼朝はこれを禁圧した。ここからも、軍事力を独占しようとする頼朝の意図が窺われる。

ここに一般行政は公家政権が、そして国家的な軍事・警察権は頼朝が掌握するという、鎌倉時代の基本的な体制の樹立が表明されたのである。また、この頃頼朝は荘郷地頭制度の基礎となる平氏没官領を獲得していたし、平氏追討の最前線の諸国では国内の御家人を統率する「守護」も出現していた。こうしてみると、一ノ谷合戦後にはまさしく鎌倉幕府の基本的な骨組みが確立したことになり、合戦の勝利によって幕府成立の重要な一歩がしるされたといえる。

かくして、公家政権の中枢である京・畿内は頼朝麾下の源氏軍の支配下に入った。そして公武間の交渉を担当したのが、源義経だったのである。

源義経の活躍　先述のように、当初は義経が平氏追討の任を担う予定であった。その彼が京に留まって公武交渉を担当するようになった原因は何か。『吾妻鏡』（元暦元年八月十七日条）は、義経が頼朝に無断で左衛門少尉・検非違使に任官したため、怒った頼朝が出陣を止めたとする。しかし、近年の研究によれば無断任官問題は『吾妻鏡』の虚構であり、義経が出立できなかった原因は、七月に勃発した伊賀・伊勢平氏蜂起の残党追討に忙殺されたことにあったと考えられている。また、義経が担当した京・畿内におけ

る治安維持と公家政権との折衝には、追討以上に重要な政治的意味があったから、頼朝は義経を信頼し政治的能力を高く評価していたことになる。

義経は一ノ谷合戦から屋島合戦に出撃する元暦二年（一一八五）二月までの約一年間在京し、先述した伊賀・伊勢平氏の残党追捕や、荘園等における兵粮徴収といった武士の非法停止、さらに十一月には西国で所領を得た者に対し、所領を新たな支配者に確実に支配させる「沙汰付け」という重要な職務等を担当している（『吾妻鏡』十一月十四日条）。義経が管轄した地域は、翌年その職務を受け継いだ「鎌倉殿御使」と呼ばれる使節が担当した畿内及びその周辺一一カ国にほぼ相当するものと考えられる。したがって、摂津も彼の管轄範囲に含まれることになるが、残念ながら神戸市域に関する活動の記録は残っていない。

写真47　源義経像（中尊寺蔵）

一方、前線に赴いた範頼は山陽道から九州の豊前に進撃するが、安徳天皇や神器の安全な奪回のために平氏を包囲し降伏させようとする頼朝の作戦、そして平氏の頑強な抵抗によって戦闘は長期化することになる。元暦二年に入ると兵糧米の不足もあって東国武士たちに厭戦気分が広まり、随行した侍所別当和田義盛までもが帰国を望むありさまとなったという（『吾妻鏡』正月十二日条）。こうした追討の遅滞は平氏を再起させかねないし、京の飢餓状態を悪化させることにもなる。これに危機感を抱いた義経は、屋島攻撃に出立することになる（『吉記』正月十日条）。

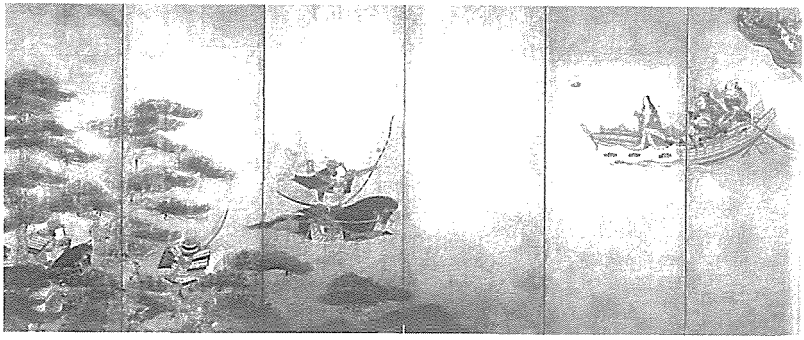


写真48　源平合戦図屏風　屋島合戦図（神戸市立博物館蔵）

義経出陣の背景に頼朝の命令があったことは、先述した鎌倉殿御使の上洛からも明らかである。『吾妻鏡』によると、頼朝は中原久経と近藤七国平を鎌倉殿御使として上洛させ、平氏追討の兵粮徴収のために東国武士と荘園との紛争を停止させた。この任務は義経が担当した職務の代行だったのである。後白河院は近臣高階泰経を摂津国渡辺に派遣し、まさに出航しようとする義経の制止を試みた。これは、京中の武士が不在になることを恐れたためであったという（『玉葉』二月十六日条）。この逸話は、義経が院から深い信頼を得ていたことを物語っている。

屋島の合戦においても、頼朝の構想通り義経は畿内・西国の武士を組織した。かつて主君源頼政や一族を討たれたことから、平氏に遺恨をもつ渡辺党の水軍を組織した義経は、暴風雨を衝いて渡辺を出立し、淡路（あわじ）を経ずに短時間で阿波（あわ）国に上陸した。大阪湾の気象状況や海運に通じた渡辺党の支援があったからこそ、強引な渡海が可能となったのである。そして阿波国では、平氏家人田口氏と対立する近藤親家の先導を得て、わずかな軍勢で平氏の拠点屋島を急襲し、平氏一門を追放することに成功したのである（『吾妻鏡』二月十八日・十九日条）。

この結果、平氏一門は都落ち以来の拠点を失い、最後の拠点として知盛が根拠地としていた長門彦島に赴くことになる。すでに範頼軍が九州に渡っていたために、平氏は文字通り袋の鼠となったのである。ここに至れば源氏の軍事的勝利は決定的であり、頼朝は安徳天皇と三種の神器奪回のため「追討遠慮をめぐらすべき事」（『吾妻鏡』三月十四日条）を範頼に伝えていた。とくに神器奪回によって、頼朝は後白河や公家政権に対し大きな発言力を得ることができると考えたのである。

しかし、追討の最前線に立ち、兵粮問題の深刻さを痛感していた義経には、遠く戦場を離れて大局的な政治情勢を見通す頼朝のような悠長な作戦は受け入れがたかった。三月二十四日、義経は関門海峡の壇ノ浦において、水上戦闘に備えて組織した熊野以下の水軍を先頭に平氏と衝突し、圧倒的な勝利を収めた。しかし、清盛室の時子、知盛以下の平氏一門はもちろん、安徳天皇や神器の一つ宝剣は海底に没してしまったのである。こうした性急とも言える攻撃の背景には、一ノ谷合戦後の平氏一門の首の問題と同様に、義経が平氏に対し強い敵愾心を抱いていたことも関係したと考えられる。

それにしても、頼朝が安徳と神器の奪回を希求していたことを考えれば、天皇と神器を失ったことが頼朝を強く刺激するのは当然である。このことが、やがて頼朝の義経に対する不信を増幅させて、両者の対立を深刻化させる一因となった可能性も高い。

頼朝と義経と対立についてはひとまずおいて、つぎに神戸市域に大きな影響を残した平氏一門が急速に没落した背景を簡単に論じておくことにしよう。

平氏滅亡の原因

福原遷都や大輪田泊における日宋貿易など、神戸に深い関係を有した平氏一門は壇ノ浦合戦で無残に全滅していった。振り返れば、清盛が八部郡の検注を行って福原と初めて関係を有してから二三年、そして後白河院を幽閉して高倉院・安徳天皇体制を樹立した治承三年（一一七九）十一月から数えれば、そのわずか五年余り後に一門は海の藻屑となったのである。まさに「たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」（『平家物語』）であった。

平氏はなぜこのように急激に没落したのであろうか。通常、この原因としては、平氏の貴族化や荘園・知行国といった旧来の支配体制に対する依存が地方武士の反感を招いたこと等が指摘されている。しかし、貴族化したことがどのように地方武士の不満につながったのか不明確であるし、貴族的なものに反感をもつのならばどうして院政のもとで反乱が発生しなかったのかが説明できない。また荘園・知行国に依存したことを理由としても同様の疑問があるし、しかも鎌倉幕府が関東御分国や関東御領といった知行国・荘園を基盤とした点が理解できなくなってしまう。このように通説では平氏の急激な没落を説明することは困難である。そこでこうした通説を離れて、平氏滅亡の原因を探ることにしたい。

ここでまず想起されるのは、絶対的な権力を握っていた清盛の急死や、後継者宗盛の無能、さらには後白河院の謀略といった点である。たしかに、これらが滅亡に関係したのは疑いない。しかし、歴史の流れは個人の力量・能力によって規定されるわけではない。やはり、同時多発的に反乱が勃発したことが示すように、根本的な問題は平氏が広汎な諸勢力の反発を受けた点にこそあったと見るべきである。

反平氏蜂起が発生した原因の一つは、後白河院の幽閉と、それに伴う諸政策にあったと考えられる。清盛

が自身の血縁関係にある皇統を確立しようとして以仁王やその背後の八条院と対立したこと、また厳島神社の社格上昇や宗教界を統括する院の幽閉等によって主要な権門寺院との衝突を招いたことは、すでに前章でふれた通りである。まさに平氏の強引な施策が国家権力の中枢の分裂を招いたことになる。この結果、以仁王・源頼政の挙兵が勃発する。挙兵は簡単に鎮圧されたものの、軍事的緊張は諸国に拡大してゆく。

かくして、第二の原因である軍事編成の欠陥が露呈することになる。後白河の幽閉により多数の知行国を奪取した平氏は、諸国に一門・家人を送り込むとともに、東国の大庭景親や九州の原田氏のような旧来の家人らに大きな権限を与えた。こうした少数の平氏家人に、多くの地方武士を従属、統制させようとしたのである。この矛盾が軍事的緊張の増大とともに激化し、平氏家人に抑圧された多くの武士団の一斉蜂起を招き、ついには同時多発的な内乱をも惹起するに至ったのである。

これらの点を総合するならば、政権を自由に行使しうる立場になった平氏は、自身と私的関係にある者にのみ特権を与えて、ほかとの軋轢・衝突を生じたといって差し支えない。元来、私的な人間関係である主従関係を横桿として形成されるのが中世的な政治勢力である権門の大きな特色であった。平氏も、そうした私的関係にある皇族・神社・武士団を政治的基盤としたが、それらを強引に政権・国家権力の基軸に据えようとしたために、ほかの諸勢力の一斉反発を受け、ついには政界の頂点に立ってから短期間で滅亡の運命を辿るに至ったのである。したがって、平氏は決して古代的だったために滅亡したのではない。むしろ中世的であったことこそが、滅亡の根本原因であったといえよう。

さて、平氏は歴史の転換期の中で文字通り劇的な滅亡を遂げたが、長年福原を拠点とした平氏は神戸の地

に様々な影響を与えていた。以下では平氏が去った後の福原等と平氏一門とが関係する出来事について紹介することにしたい。

平氏の余映

一ノ谷合戦から二カ月程を経た寿永三年（一一八四）四月、平氏没官領として収公されていた荘園の内から平頼盛の所領が返還されている。頼盛は清盛の弟であるが、平治の乱において頼朝の命を救った池禅尼の男であり、源平争乱に際して微妙な立場となった彼の一族は都落ちに際しても一門と帯同せずに京に止まっていたのである。

この時に返還された荘園の中に八条院領兵庫三カ荘が含まれており、頼盛は同荘の預所であった。三カ荘とは兵庫上・中・下荘のことで、現在の中央区から須磨区にわたる広範囲な荘園であったと考えられている。

この兵庫荘の名は、長治二年（一一〇五）の「九条家文書」に初めて見出される。したがって、兵庫の地名の起源を清盛が造営した「経の島」に求める説が俗説に過ぎないことは明らかである。また、安元二年（一一七六）の八条院領目録に、院庁分の所領としてすでに奉免の官符を受けていたことが記されている。頼盛が預所となった時期は不明だが、清盛が八部郡を検注して同郡を知行した頃には平氏が荘園に関与したことは疑いない。これ以後も頼盛の子孫が預所を世襲したと考えられ、鎌倉初期においてもしばらくの間は兵庫荘と平氏とは関係を有しつづけたことになる。

逆に平氏から解放されて復旧した荘園もある。九条家領であった輪田荘は、その名の通り兵庫区の和田にあった荘園であった。先述した「九条家文書」の建仁二年（一二〇二）の輪田荘々官源能信等申状（『九条家

文書』一二三二）によると、同荘は応保二年（一一六二）に八部郡に対する藤原能盛の検注と支配の結果、周辺の小平野・井門・武庫・福原の四荘から侵略を受けて三一町も減少したという。平氏滅亡後にようやく回復し、建仁元年に一円不輸の宣旨を受けて独立した荘園となっている。すなわち、平氏が福原周辺の地域に与えた影響は平氏の滅亡から十年余りも継続していたことになり、平氏が深く福原周辺に根を降ろしていたことを物語っている。

写真49　敦盛塚（須磨区）

このように、福原と深い関係を有して、大輪田を国際貿易の舞台として発展させた平氏、とくに清盛に対する追慕の念が、鎌倉時代以降も港湾として発展した兵庫付近に生ずるのも当然のことであった。たとえば、今日兵庫区に残る十三重の石塔「清盛塚」は弘安九年（一二八六）二月に建立されたが、本来はその前年に西大寺僧叡尊が行った供養と関連して建立されたとする説もあり（本章第二節参照）、清盛との関係は不明確である。ところが、すでに室町時代には清盛の供養塔と意識されており、執権北条貞時が清盛の追善供養のために建立したという伝承が広まり（『摂津名所図会』）、さらには墓碑と信じられるようになった。清盛に対する追慕の念が、彼の供養塔、墓碑とする伝承を生んだことになる。

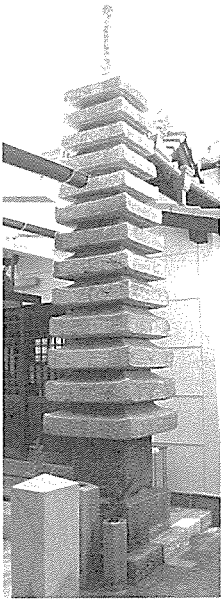


写真50　平忠度の腕塚（長田区）

なお、清盛塚の周辺には、清盛の経ヶ島造営や福原遷都などの伝承にまつわる遺跡が数多く存在しており、兵庫と平氏の関わりの深さを感じさせる雰囲気を有している。このほかにも市内の随所に、一ノ谷合戦における敦盛以下の戦死者に関する伝承や、福原の邸宅・行在所などの旧跡を称する遺跡が多数散在しており、平氏と神戸の結びつきの強さを物語っている。

2　幕府体制の確立

義経の没落

壇ノ浦合戦以後、源氏軍勝利の立役者義経は一転して頼朝に疎まれ、両者の対立が次第に深まっていったことは周知の通りである。『吾妻鏡』によると、梶原景時から義経を非難する報告を受けた頼朝は、西国の御家人に対して義経の命に従うことを禁止した（文治元年四月二十九日条）。ついで五月に義経が捕虜の平宗盛以下を同道して鎌倉に下ると、彼を腰越に留めて鎌倉入府を禁じ、さらに落胆して帰京した義経に追い打ちをかけるように、いったん彼に与えた平氏没官領を奪い取ったとする。

例によって『吾妻鏡』には疑問が多い。事実義経は、八月に頼朝の推挙で播磨守と並ぶ受領の最高峰伊予守に任ぜられており、この頃まで両者の対立が決定的になっていたとは考えがたい。しかし、この人事には義経を京から鎌倉に召還しようとする頼朝の意図があった。それまで義経が任にあった検非違使は在京が不可欠であったのに対し、受領は在京する必要がなく、一門の受領はいずれも鎌倉に居住していたのである。これに対して義経は強引に検非違使も兼任し、鎌倉帰還を拒んだため、頼朝は伊予に地頭を派遣して義経の

国務を妨害し、十月には京の義経のもとに刺客土佐房昌俊を派遣するに至ったのである。

相次ぐ抑圧にたまりかねた義経は、かつて義仲とともに入京した叔父行家と結んで後白河に迫り、頼朝追討の宣旨を獲得したのである。しかし、畿内周辺の武士が挙兵に呼応しなかったため、彼らは豊後の武士団や平氏残党等の組織を目指して、鎮西に向け摂津大物から出立しようとしたが、折からの暴風雨で渡航に失敗し、義経・行家は行方をくらますこととなった。その後、行家は和泉国で追討され、義経は奥州平泉の藤原秀衡の下に逃れるが、文治五年（一一八九）に秀衡の男泰衡に殺害される運命にあった。

このように、義経が頼朝と対立し、劇的な滅亡に追込まれた原因として様々な点が指摘されている。先述のように無断任官問題はほぼ否定されているが、壇ノ浦における天皇・神器の奪回失敗、平氏追討で無視された東国御家人の不満、そして壇ノ浦合戦後、後白河院の御厩別当という親衛隊長に就任し、院の直属武力となったこと、さらにはこともあろうに捕虜となった平氏の重鎮平時忠の女を娶ったこと等々である。もちろん、これらが複合して頼朝の不信と怒りを惹起したと考えられるが、頼朝が鎌倉召還を企図したことが示すように、義経が京で大きな地位を築いたために、頼朝と対抗したり、鎌倉幕府を分裂させたりする可能性が生じたことにこそ最大の問題があったと考えられる。

このことは、義経の没落が、彼個人の失策や政治的力量不足の結果ではなかったことを示す。彼に限らず頼朝に従順であった兄範頼や、挙兵当初に大きな功績があり高い政治的地位を有した甲斐源氏の一族が相次いで粛清されていったことを考え合わせると、幕府の成立期においては、こうした源氏一門の有力武将の存在自体が許されない側面があったのである。当時、頼朝は御家人との主従関係を通して、自身を頂点とする

強固な組織を形成しようとしていた。そうした頼朝にとって、自身に比肩しうるような権威・声望を有した武将は、かかる組織の確立を脅かす危険性を有していたのである。ここに、頼朝が義経を粛清せざるを得なかった原因が存した。

いずれにせよ、義経の政治生命は挙兵失敗の段階で終わりを告げたのである。しかし、没落した義経は頼朝に大きな成果をもたらすことになった。彼は頼朝追討宣旨を両者に下した院の失策を最大限に利用したのである。彼は約千騎の武士とともに妻政子の父北条時政を上洛させ、武力を背景に様々な報復措置を行うことになる。

ここで頼朝は「天下草創」を称して、事実上新体制作りを目指した大規模な改革を断行した。まず後白河の院近臣を解官配流するとともに、盟友九条兼実（かねざね）以下一〇人の議奏公卿を任命して後白河の専制を抑止する体制を作った。その一方で、義経・行家の行方を追求することを名目に、有名な守護・地頭設置の勅許を得たとされる。

しかし、この時設置されたのは、鎌倉時代を通して存続した守護・地頭ではなく、諸国を守護するために一国に一人ずつ任じられた国地頭と惣追捕使（そうついぶし）と考えられている。この国地頭は一国内の武士と荘園を支配し、段別五升の兵糧米を徴収するという強大な権限を有した存在であった。しかし、かかる国地頭は在地の秩序を混乱させたために、翌年には廃止されることになったとされる。神戸に関係する摂津・播磨の国地頭のうち、前者は京都守護となった北条時政が兼任し、後者はすでに播磨の守護に当たっていた梶原景時が兼任したものと見られる。

この景時は、先述のごとく一ノ谷合戦の直後から正治元年（一一九九）の滅亡まで、一貫して播磨の守護・国地頭等の地位にあり、同地と密接な関係を有していた。また神戸市域でもいくつかの事績を残している。以下では彼の行動について検討することにしたい。

梶原景時と播磨

梶原景時は相模の武士で、石橋山合戦において頼朝の危機を救ったことから深い信任を受け、侍所の次官である所司として御家人統制の中心的立場にあった。先述のごとく一ノ谷合戦の直後に最初に京に飛脚を送ったのもこの役職のためである。彼が目付役として義経を監視し、頼朝に讒言したとする『吾妻鏡』の記事には疑問があるが、彼の立場を反映した逸話といえる。さらに、武士ながら文筆の才能を有したこと、親幕府派の有力公卿徳大寺実定に伺候していたことなども頼朝の信頼を得た原因であった。

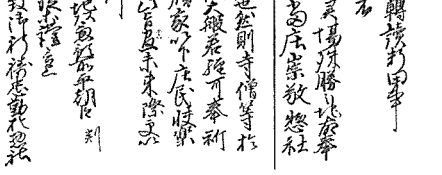


写真51　梶原景時寄進状（京都大学所蔵太山寺文書謄写本）

その景時は、先述のごとく一ノ谷合戦の直後である寿永三年（一一八四）二月に、播磨以下の守護を命ぜられた。当初は山陽道において平氏とも交戦しており、この「守護」という地位は平氏と対峙する最前線の警護という軍事的な性格が強い地位であった。

さて、景時は播磨の守護を担当し始めた直後から早くも神戸

市域と深い関係を有している。「太山寺文書」に収められた寿永三年五月付の地頭兼預所平朝臣某田地寄進状写（『県史』二「太山寺文書」（京都大学）四）によると、播磨国明石郡の伊川荘の地頭兼預所であった「平朝臣某」は同郡の太山寺に対し、伊川荘から四季大般若経転読料田として一町二反を寄進し、また同時に武士の乱入・狼藉を禁止している（同上五）。この平朝臣は景時と考えられ、当時彼が伊川荘の地頭兼預所の地位にあったこと、伊川荘が平氏の没官領であったことが分かる。さらに、景時は文治三年（一一八七）二月にも伊川荘内の荒野五町を講堂修理料田として寄進している（同上七）。太山寺と景時の密接な関係が窺われるだろう。

この太山寺は現在垂水区伊川谷にある天台宗の名刹で、院政期以降確実な史料に現れるようになり、鎌倉時代には多くの悪僧を擁して軍事的にも注目される存在となっていた。おそらく景時は、播磨を支配する最初に当たって、東播地域で深い尊崇を受け、大きな勢力を有していた寺院に保護を加え、国内支配を円滑にしようと考えたのであろう。

一方、『玉葉』文治元年十一月十四日条によると、景時は守護代を国衙に派遣して小目代を追放し、国倉を封印するという事件を起こしている。これは、直前に後白河院が義経に対し頼朝追討院宣を与え、頼朝が報復しようとする時期に当たっており、しかも播磨が院の分国であったことから、京の混乱や院の窮地を利用した行動であったと考えられる。翌年、国地頭が廃止された後も景時は守護に留まったが、守護代官が国領に介入したり、武士が所々を押領したことが問題となるなど、公武の紛争が繰り返されていた（『吾妻鏡』）。景時は幕府内部の有力者でもあり、また守護・国地頭として播磨国内に大きな影響力を有していたために、こうした紛争も再三惹起されたのであろう。

なお、『吾妻鏡』文治元年八月二十四日条によると、頼朝の御家人下河辺行平が九州の平氏残党の掃討から帰還した際、頼朝は勲功の賞として一国の守護職を与えようとした。この時、所望の国を尋ねられた行平は「播磨国は珂璮（須磨）・明石等の勝地あり、書写山のごときの霊場あり」として播磨国を望んだという。このことは、東国武士たちにとっても須磨・明石付近の風景の素晴らしさが強い印象を与えたことを物語る。また同時に、景時のような幕府の大物が守護に任ぜられたように、同国の守護は政治的に重要な意味をもっており、御家人にとって垂涎の職であったことをも物語っている。

さて、景時は頼朝の懐刀として将軍独裁を陰で支える役割を果たしたが、建久十年（一一九九）に頼朝が死去すると、後継者頼家に下総国の御家人結城朝光を讒言したとして、三浦・和田・千葉以下有力御家人の弾劾を受け、ついに失脚するに至った。長年、景時が御家人統制の中枢にあって、御家人の動向を監視するとともに、彼らの言動を将軍に注進してきたことが強い反感を買ったのであろう。また、この背景には将軍独裁を嫌う御家人の意向も介在していた。『愚管抄』は景時の処罰に同意したことを「頼家ガ不覚ニ人オモヒケル」として、頼家失脚の要因としている。翌正治二年正月、京に向おうとした景時は駿河国清見関で地元の御家人等によって合戦の末に討ち取られた。

景時にかわって、播磨守護には下野の豪族小山朝政が就任している。朝政は平将門を討取った藤原秀郷の子孫で、先祖代々下野の在庁官人として大きな勢力を有してきた。彼は寿永二年に頼朝の叔父志田義広が挙兵した際には討伐に功績を挙げ、また建久元年（一一九〇）の頼朝上洛に随行して右衛門尉に任官している。『吾妻鏡』正治元年十二月二十九日条によると、その就任に際して「朝政沙汰すべきことは、謀叛殺害

人のことばかりなり。国務に相交わり、人民の訴訟を成敗するべから」ざることを命ぜられたという。このことは、当時すでに守護の基本職務とされる大犯三カ条が成立していたこと、また景時が国務に介入し、ややもすれば紛争を惹起していたことを暗示している。

つぎに、摂津に対する幕府の支配を検討することにしたい。

幕府の摂津支配　摂津の支配については、先述のごとく京都守護となった北条時政が摂津の国地頭・惣追捕使を兼ねていたものと考えられる。摂津の国地頭が京都守護の兼任となった背景にはいくつかの理由が挙げられる。まず、一ノ谷合戦に勝利して以来、摂津を含む畿内の紛争処理が、まず源義経、ついで鎌倉殿御使に管轄されてきたように、畿内が特別な行政区と考えられていたことがある。また、荘園領主と幕府の間の紛争が最も頻繁に発生する地域であること、さらに畿内周辺に姿を消した義経の追捕という目的も、彼が畿内諸国の国地頭を兼ねた原因であろう。

その時政は、就任から四カ月に満たない文治二年（一一八六）三月に、早くも国地頭を返還しているが、諸国の惣追捕使（守護の前身）には留まっており、摂津の軍事・警察権は依然として彼が掌握していたものと考えられる（『吾妻鏡』三月一日条）。

国地頭を辞退した直後の三月末に時政は鎌倉に帰還し、かわって頼朝の妹婿一条能保が京都守護を継承したが、洛中の警護は時政の眼代（代官）北条時定以下が担当することになる。この時定については、近年の研究で時政の弟とする説が有力となっている（野口実「伊豆北条氏の周辺」）。彼は洛中の警護に止まらず、義経・行家等の追討にも従事しており、先述の通り文治二年五月には和泉国で行家を追捕・殺害したほか、翌

月には大和国で義経の婿源有綱を討ち取る等、畿内一円で活動している。したがって、当然時政と同様に摂津の軍事・警察権にも関係していたことになる。

この点で注目されるのが、『吾妻鏡』文治三年九月十三日条に見える時政を奉者とする頼朝の御教書である。その内容は国衙在庁の注文によって、国内の下司・押領使に内裏守護以下の関東の所役を勤仕させることを命ずるとともに、摂津国で時定が「河辺の船人」を御家人と称して下知状を与えたことを非難し、さらに仁和寺領の武士に対する所役の除外を命じたものである。

この文書は『吾妻鏡』によると「三条左衛門尉」に宛てたものとされるが、この人物については北条時定と考えるのが妥当とされている。したがって、彼は国衙在庁に命じて国内武士に対する所役を宛課するとともに、摂津で御家人の認定を行っていたのであり、守護に相当する役割を担っていたことになる。しかし、時政が文治二年以降も惣追捕使を留保していたこと、また時定は時政の代官という立場にあったこと、そして頼朝の御教書としては異例の時政の奉書であること等から見て、時定自身が守護や惣追捕使だったわけではなく、時政の下で代官として摂津の御家人を統率するという、のちの守護代と同じ役割を果たしていたものと考えられる（上横手雅敬『鎌倉時代政治史研究』）。

また、この内容は、当時摂津国においては依然として幕府が国衙在庁に対する支配権を有し、御家人以外の武士にも幕府の所役が宛課されていたことを示している。すなわち、後に大犯三カ条に限定された守護とは異なり、国内のすべての武士を統率できたとされる国地頭と共通する権限が存続していたことを示す。

さて、時定は文治二年に左兵衛尉に、続いて検非違使にも就任したが、建久元年（一一九〇）に京を離

れて鎌倉に下向しており、その後任については不明である。ついで摂津守護として在任が確認できるのは、田中稔が明らかにした大内惟義（田中稔『鎌倉幕府御家人制度の研究』）であるが、その在任時期は建保年間（一二一三～一九）と考えられるので、彼については承久の乱に関係する箇所で論じることにしたい。

次にいったん政治の問題を離れて、大輪田泊を改修し鎌倉以降における兵庫津の発展をもたらした東大寺の勧進聖重源の問題を取り上げることにしたい。

3　俊乗房重源

東大寺再建

治承四年（一一八〇）も押し詰まった十二月二十八日、南都は山城・河内両方面から攻め込んだ平氏軍の襲撃を受け、興福寺・東大寺以下主要寺院の伽藍は無残に焼け落ちるに至った。大仏殿も焼亡し、首が焼け落ちた大仏の悲惨な姿は遠くからも見受けられて、人々に末法の時代を強く印象付けたのであった。

この年の五月、前節で述べたように平氏打倒を目的として挙兵した以仁王・源頼政に興福寺以下南都の僧徒たちは加担した。平清盛は挙兵鎮圧直後に福原遷都を行って、いったんは権門寺院勢力との衝突を回避したものの、還都するや直ちに挙兵に与同した寺院に対する報復を行った。政権が在京する以上、軍事的脅威となる大寺院の存在は容認しえなかったのである。そして、まず十二月初めに近江の園城寺が炎上し、ついで南都の興福寺・東大寺も猛火に包まれることになった。

写真52　重源木像（浄土寺蔵）

翌年、清盛は南都僧綱の解官と荘園没収という強硬措置をとったが、これらは彼の急死とともに解除され、朝廷では南都再建の動きが具体化していった。そして六月に興福寺の各堂舎の再建が諸国に割り当てられたのに続いて、八月には俊乗房重源を大勧進とする宣旨が下され、東大寺再建も軌道に乗ることになった。再建の過程で、彼は諸国の物資を奈良に運ぶために瀬戸内海東部の港湾を整備し、平氏都落ち以来荒廃するに任されていた大輪田泊の復興にも努めたのである。

まず、大輪田泊との関係を述べるのに先立って、彼が大勧進となるに至るまでの経歴を紹介することにしよう。この重源は、晩年に自身の業績をまとめた『南無阿弥陀仏作善集』によると、保安二年（一一二一）に京で紀末重の男として生まれ、十三歳で醍醐寺に入って以来、大峰・熊野・葛城等で厳しい修験道の修行を積み、ついで高野山でも修行したという。こうした時期に、強靱な肉体を養うとともに、念仏信仰に深く帰依したものと考えられる。

また、彼を特徴付けるのは三度とされる入宋経験である。とくに仁安二年（一一六七）に入宋した際には、天台山で日本における臨済宗の開祖栄西と出会い、ともに帰国したことはよく知られている。この間に大仏様等の新技術を体得したと考えられ、こうした宋の技術に関する造詣の深さによって、彼は東大寺再建の勧進聖に選ばれたものと考えられている。また大仏鋳造に活躍した宋の工人陳和卿の起用も、このような宋との密接な関係があって初めて可能となったのであろう。

彼は大勧進となるが、その職務内容は多岐にわたっていた。まず、いわゆる勧進行為としては、自身と同様の勧進聖を多数組織するとともに、院や頼朝から洛中諸家に至るまで広範に奉加を募っていった。たとえば、頼朝は砂金千両、ついで米一万石、砂金千両、上絹千疋を喜捨したという。こうした苦心の結果、文治元年（一一八五）八月二十八日には後白河院を迎えて大仏開眼供養が執り行われることになったのである。

もちろん、東大寺の多くの堂舎を再建するためにはさらに莫大な費用が必要で、こうした奉加のみによってすべてを賄うことは困難であった。そこで、まず文治二年に周防国を東大寺造営料国として知行するとともに、東大寺のほか、高野山・周防・伊賀・摂津渡辺・播磨・備中の七カ所に別所を設けた。この別所は再建工事の作業監督に当たる事務所で、東大寺・高野山を除けば、東大寺の荘園・杣等、再建事業の物資調達の現場に設置されたものであった。こうした別所の経営、石材・木材の搬出と輸送、建築作業の指導監督なども、大勧進としての重源の職務に含まれていたとされる。

やがて、建久六年（一一九五）には大仏殿が完成し、後鳥羽天皇、源頼朝以下の臨席のもとで一応落慶供養を迎えるが、再建事業はさらに継続している。重源が大輪田泊の修築を申請するのは、その翌年のことであった。

大輪田泊の修築

重源は建久七年（一一九六）六月、太政官に対し魚住・大輪田・一洲の築造に関する申請を行い許可を受けている（『県史』五「東大寺文書」〔摂津国兵庫関〕一）。このうちで彼が最も重視した泊は魚住で、それは東大寺領播磨国大部荘からの資材運搬に便利だったためである。大部荘は古くからの東大寺領で、建久三年にいったん宋人の鋳物師陳和卿に与えられたが、彼は自身で統治することが困難なた

めに大仏御領に寄進し、以後は重源が実質的に支配して東大寺再建の費用を負担する荘園となった。そして荘の一隅に別所を設置し浄土堂を建立したが、この堂が今日小野市に現存する浄土寺である。

なお、彼が瀬戸内海東部にある三つの泊の修築を申請した背景には、すでに東大寺造営料国となっていた周防からの物資の運搬の便宜を考えた面もあったと考えられる。

さて、彼はこの申請の中で大輪田泊について、この泊はかつては再三修復を加えられたものの、ここ二〇年間は放置されていて、石椋（堤防）はすっかり崩壊し、風波が襲いかかって船は危険に曝されている状態であると述べている。この年は平氏の都落ちから一三年目で、二〇年前は日宋貿易の全盛期であったことを考えれば、放置された期間はもう少し短かったと考えられるが、いずれにしてもかつて平氏の下で繁栄した大輪田の荒廃した無残な様子を窺わせる記述であることには違いない。

また、重源は申請の中で、魚住は平安前期以来修理されず、当時は接近する船の十中八九が沈没するとされるありさまで、人びとの申し入れによって修築を開始したと述べている。さらに、かつての河尻に当たる一洲も、当時は広い砂浜になって四方から風を受け、泊に入ろうとする船は風の収まるのを待てずに沈没したという。こうして見ると、大輪田に限らず瀬戸内海東部の主要港湾がいずれも荒廃していたことがわかる。このことは単に大輪田のみが平氏の滅亡によって荒廃したのではなく、やはり十年に及ぶ源平争乱の影響等によって、舟運や港湾の管理自体が衰退していたことを物語るものである。

さて、この申請において重源は、以下の方策によって費用を調達することを提案している。まず、山陽・西海・南海諸国の荘園・公領から運上される年貢米から一石につき一升（一%）を徴収すること。また舟の

主要材である舟瓦を「修築の固」として用いるために、右の三道の国衙は郡毎に、荘園は一所につきそれぞれ一艘を供出させること。和泉・摂津・播磨以下一〇カ国の港湾及び淀・河尻の廃船を選ぶこと。そして山城・河内・摂津・播磨・淡路の五カ国の荘園・公領を論ぜず、石材・木・竹等を徴収すること。さらに摂津・播磨・淡路諸国と河尻の在家は修復する所々に近いので、修復の人夫として徴発すること。重源の申請は以上の五点で、太政官はこれらを認めている。

のちに兵庫津には東大寺の関が設けられ、鎌倉後期には一石につき一升の津料が徴収されることになるが、『兵庫県史』はこの重源の年貢米の徴収を津料の起源としている。額も同一であり、東大寺との関係から考えてもその可能性は高いと言える。また、承元元年（一二〇七）に浄土宗の宗祖法然が配流された時、兵庫津において多くの人々と結縁したという記述が見られ（『法然上人行状画図』）、兵庫が港湾として復興しつつあったことが分かる。もっとも、この修築作業が完遂されたか否かについては疑問である。重源が建永元年（一二〇六）六月に没して以後、東大寺再建事業が事実上断絶したことから考えても、修築工事も中途で終わった可能性は高い。

なお、この時期には戦乱で荒廃した寺院の再建が相次いでいる。空海ゆかりの東寺もその一つで、高雄の神護寺を再建した荒法師文覚上人がその任に当たり、文治五年（一一八九）十二月と建久四年四月の二度にわたって播磨が造営料国となった。文覚は播磨の目代となって費用の徴収に活躍している。

さて、以上で聖による寺院の再建と神戸の関係を終わり、次に承久の乱に至る公家政権の動向と、神戸の関係を論じることにする。